

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5019	5019001			208005	総務省	消防法第13条及び危険物の規制に関する政令第31条 ²	メタノールの貯蔵所又は取扱所の所有者、管理者又は占有者は、甲種危険物取扱者又は乙種危険物取扱者で、6か月以上危険物取扱いの実務経験を有するものの中から危険物保安監督者を定め、その者が取り扱うことができる危険物の取扱作業に関して保安の監督をさせなければならない。	C		貯蔵し、又は取り扱う危険物の危険性に応じて基準を定めているものであり、直接メタノール型燃料電池(DMFC)用メタノールの貯蔵及び取扱いについても当該基準を満たすものであることが必要である。		一般小売店の中にも、量販店からコンビニまで多種多様であり、家電量販店の場合、当該燃料電池も大量に販売されることが予想され、400リットルの基準では対応不可である。また卸し等の流通段階で400リットルを超える量を貯蔵することは十分に考えられる。安全性の確保を前提として、当該規制に対する対応策を早急に検討すべきである。加えて、400リットル以下の保管に際しても、指定数量未満の貯蔵、取り扱いの際も、指定数量の5分の1以上の場合には市町村条例に基づき届け出が必要であったり、また、危険物取扱責任者の設置は、指定数量に関わらず設置が必要であるとされているので、一般消費者への流通において障害となっている。以下要望者意見も踏まえて再検討されたい。「貴省ご回答における「基準」については、その根拠が明確ではない。そもそも直接メタノール燃料電池は携帯電話、パソコン等の小型電子機器における利用等を通じて、エネルギー消費の多様化を可能にするものであり、それによって得られる社会的な利益は大きいものと期待され、政府においても燃料電池の普及を図るべく様々な施策が実施されているところである。また、普及のためには大量生産による価格の低下と一般小売店での販売が必須である。したがって、当該規制について緩和が必要である。」	株式会社三井物産戦略研究所	1	A	危険物保安監督者の定めを要しない直接メタノール型燃料電池(DMFC)用メタノールの貯蔵所及び取扱所の設置	DMFC用燃料としてのメタノール購入が一般の消費者にも可能となるように、コンビニエンスストア等の小売店で販売を行う。なお、販売するメタノールについては、液漏れ等が発生しないよう密閉性の高い容器にメタノールを充填し、メタノール消費後の容器は、メタノールを販売した小売店又はメタノール取扱業者が回収する。当該容器にメタノールを再注入する場合には、メタノール取扱業者がこれを行う。	燃料電池の燃料として利用されるエタノールの貯蔵、取扱等に係る規制の緩和を図ることにより、燃料電池の流通及び利用を促進し、もってエネルギー消費の多様化に資するものとする。	消防法第13条及び危険物の規制に関する政令第31条 ²	総務省消防庁	参考資料「直接メタノール型燃料電池(DMFC)に用いるカートリッジのイメージと安全対策」	
5025	5025001			208006	総務省 国土交通省					国土交通省が回答			(社)情報通信設備協会、情報通信ネットワーク産業協会、(社)電気通信協会、(社)電子情報技術産業協会、(社)電気電話工事協会、(財)日本データ通信協会(注)幹事団体を先頭に、他の団体は50音順とした。	1	A	電気通信工事専任技術者要件に国家資格「工事担任者」を追加	国家資格(総務省)である「工事担任者」は情報通信分野の高度な資格であり、建設業法第7条(許可の基準)第2号イ及び第26条(主任技術者及び監理技術者の設置等)について「主任技術者」に直ちに認めるよう要望する。	情報通信網は、電気通信事業者が行う情報通信設備工事のみならず、ネットワーク構築工事と一体となって始めてネットワークとして利用の用に供されるものである。しかも、構内における情報通信工事は、近年、「IT化の進展に伴いビル等の情報化設備は着目(高度化、大規模化)しているものも出現している。情報通信の建設工事を主体的に行うためには、建設業法上の専任技術者の確保は必須であり、情報通信工事をを行うものにとって業務経験充足による要件のみでは有資格者の不足は避けられない状況である。「革命は今ユーザの利用促進に関する環境整備の段階となっているが、ユーザサイドに立った情報通信設備工事に関する技術者確保の面で障害となっている。構内情報通信設備の高度化に対応する規制緩和としては、平成17年5月建築基準法第百二十九条の改正により既築ビルのエレベータ管室に光ケーブル導入を認める規制緩和がある。	建設業法第7条(許可の基準)第2号「その置業所ごとに、次のいずれかに規定する専任技術者を有すること。」とし、イにおいて「許可を受けようとする建設業に係る建設工事に關し高等学校を卒業した後5年以上又は大学若しくは高等専門学校を卒業した後3年以上上乗務の経験を有するもの」で在学中に国土交通省令で定める学科を修めたものとし、また、同法第26条(主任技術者及び監理技術者の設置等)「建設業者は、その請け負った建設工事を施工するときは、当該建設工事に關し第7条第2号イ、ロ又はハに該当する者で当該工事現場における建設工事に關する技術、知識、経験を有するもの(以下「主任技術者」という。を置かなければならない。」とし、更に「建設業法施行規則第1条(建設省令で定める学科)において「電気工事業と電気通信工事業の指定学科は電気工事業又は電気通信工事業に関する学科」とそれぞれ規定している。「工事担任者」は建設業法上の規定に照準して、建設業法第7条(許可の基準)第2号イに規定する「高等専門学校を卒業した後3年以上上乗務の経験を有するもの」として、また、工事担任者第3種資格者は、同法規定の「高等学校を卒業した後5年以上上乗務の経験を有するもの」として適用され、建設業法第26条の「主任技術者」に直ちに認めるよう要望する。	建設業法第7条(許可の基準)第2号イ 建設業法第21条 建設業法施行規則第1条	国土交通省 総務省	
5030	5030001			208007	総務省	電気通信事業法(昭和59年法律第86号)附則第5条 電気通信番号規則の細目を定めた件(平成9年郵政省告示第74号)第3条第2号	「電報業務については、NTT東西(国内電報)及びKDDI(国際電報)のみが行うことができる」とされている。 「115番は、国内電報受付番号として指定されている。」	C		115番等の1XY番号は、短くダイヤルが簡単である等の特徴を有しているが、個数が限られており、代用可能な番号空間がないという限られた観点から制約要素があることを踏まえ、「公共・緊急性が認められるもの等に対して限定的に使用を認めているものである。 国内電報業務については、国民生活における必要最低限の通信サービスであるとの考えから、NTT東西に独占させることをもって全国における提供を確保しているところであり、このような国内電報業務の特殊性に鑑み、限定的な使用を認めるに足りるものとして、NTT東西の提供する国内電報業務への受付番号として115番を指定しているものであり、これと異なるサービスに対して公平に指定することは適当ではない。	株式会社KSGインターナショナル	1	A	電報受付番号「115番」を全ての電気通信事業者に開放	電報受付番号「115番」の使用許可について、希望する電気通信事業者に対し許可する条件を要望します。具体的には、「115番」の電話番号を利用することが出来る企業を、現在DNTT及びKDDI以外の電気通信事業者へ広げ、電報と同様の類似サービスである「115番」によるメッセージカードの受注・作成・送達サービスを提供しようとする全ての電気通信事業者が公平に「115番」を利用できるようにすべきである。 また、電報は「115番」と同様の類似サービスの利用者自身の判断で、より多くの電報類似サービスを利用者自身と判断出来るようになるメッセージカードサービスを選択できる環境を整えるべきである。	電報の受付番号「115番」を、NTT、KDDI以外の電気通信事業者も利用できるように開放する。 国内に存在する全ての電気通信事業者が、電話回線および電話を介して電報類似サービスを受信する際の受付電話番号を「115番」とし、利用者は、自身が加入する電気通信事業者(電話会社)が発信する公平なガイドラインに従い、利用したい電報および電報に類似したサービスによるサービスを提供する会社を公平に選択出来るようにする。	電報事業については、電気通信事業法(昭和59年法律第86号)第3条第2号に規定する「電報」に「115番」が追加されることにより、NTT東西の電報事業に代わって、民間企業が提供する電報サービスが利用可能となることとなる。これは、電報事業の競争促進に資するものとして、民間企業が提供する電報サービスが利用可能となることとなる。これは、電報事業の競争促進に資するものとして、民間企業が提供する電報サービスが利用可能となることとなる。これは、電報事業の競争促進に資するものとして、民間企業が提供する電報サービスが利用可能となることとなる。	電気通信事業法	総務省			
5035	5035003			208008	総務省	消防法 石油コンビナート等災害防止法	貯蔵所に係る位置、構造及び設備は技術上の基準に適合するように維持しなければならない。 また、特定事業者は、その自衛防災組織に、政令で定めるところにより、防災委員を置くとともに、当該自衛防災組織がその業務を行うために必要な化学消防自動車、消火用薬剤、油会特種その他の機械器具、資材または設備を備え付けなければならない。	C		危険物の規制に関する政令の一部を改正する政令(昭和52年政令第10号)(以下「52年改正」という。)施行以前の屋外タンク貯蔵所は、1万キリットル以上のものは平成21年3月31日まで、1万キリットル未満のものについては平成25年3月31日までに基準に適合するものとして改修すればよい。また、浮き屋根式の特定屋外タンク貯蔵所についても平成17年3月31日までに当該タンクの構造及び設備の実態についての調査並びに当該構造及び設備を新基準に適合させるための工事に關する計画の届出をしたものについては平成29年3月31日までに改修すればよいこととされている。 改修は屋外タンク貯蔵所の耐震性を確保するために必要な措置であり、十分な猶予期間を設けていることから、使用継続が想定されるタンクについてはその期間内に改修することとしていることについては、十分な合理性がある。 また、石油コンビナート等災害防止法の防災資機材等の義務規定は、特定事業者が利用している屋外貯蔵タンクの規模・危険物取扱量等に応じた数量を義務付けるものであることから、一部のタンクを休止することにより、直ちに当該特定事業者が配備が義務付けられた防災資機材等の数量に変更を生ずることとなるかどうかは不明である。したがって、特定事業所の一部の施設・設備を休止することにより、過剰・不要な防災委員・資機材を有するという弊害の実態があるかどうかについて検証する必要がある。 なお、特定事業所全体について休止中の場合については、(平成17年4月4日消防令第42号)において措置済みである。		休止中のタンクは当然危険物を有してなく、したがって危険物取扱量が減少するため、それに伴った数量も減少するということは合理性があると考えられる。したがって、一部の施設・設備を休止することによる、防災委員の人数数や資機材の配置数についての緩和について再検討されたい。	石油連盟	3	A	3. 屋外貯蔵タンク休止制度の導入について	消防法上の屋外貯蔵タンク休止制度を設けていただき、防災委員、資機材の保有、及びその他関連する各種規制に關し、休止状態を考慮した緩和措置、猶予案を講じたいただきたい。	(1) 問題点 ・製油所には、操業上の理由により、長期間に渡り内容物を貯蔵しない屋外タンクが発生することがあるが、現行の消防法、石油コンビナート等災害防止法では、こうしたタンクに対し、休止制度が設けられていないため、危険物を保有していないタンクについても、一律の規制強化に伴う改修等の法規制、あるいは防災委員、資機材確保の観点、あるいは一律に適用される「危険物を保有しているタンク」に一律に適用されることにより、防災委員、資機材を確保することは、不合理である。 ・法規制強化に伴う旧タンクの改修工事、浮き屋根の補強工事は、危険物の貯蔵を前提とした規制であり、危険物を貯蔵していないタンクの 既設休止中のタンクに対して、一律に本規制を適用するのは不合理である。 ・休止中のタンクについては、市町村条例等に基づき必要な届出を行えば、保安検査については使用開始前に実施すれば良いとの運用がなされており、こうした規制の考え方の法規制の拡大・適用を要望するものである。 ・休止中のタンクについては、市町村条例等に基づき必要な届出を行えば、保安検査については使用開始前に実施すれば良いとの運用がなされており、こうした規制の考え方の法規制の拡大・適用を要望するものである。 ・休止中のタンクについては、市町村条例等に基づき必要な届出を行えば、保安検査については使用開始前に実施すれば良いとの運用がなされており、こうした規制の考え方の法規制の拡大・適用を要望するものである。 ・休止中のタンクについては、市町村条例等に基づき必要な届出を行えば、保安検査については使用開始前に実施すれば良いとの運用がなされており、こうした規制の考え方の法規制の拡大・適用を要望するものである。	消防法、石油コンビナート等災害防止法	消防庁		

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号/民間開放	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)	
5039	5039001			z08009	警察庁、総務省、財務省、文部科学省、厚生労働省	出入国管理及難民認定法第20条、21条及び22条、永住許可に関するガイドライン(法務省入国管理局平成18年3月31日)、地方自治法第10条	在留資格の変更又は在留期間の更新を受けようとする外国人は、法務大臣にこれを申請することができ、法務大臣は、当該外国人の提出した文書に基づいて、在留資格の変更を適当と認めるときに限り、これを許可することができる。なお、素行が善良であることを証明するために、国税の納付証明書の提出が義務付けられている。	e		地方税を滞納している場合であっても、災害や病気などの理由で、徴収猶予(地方税法15条)や滞納処分(15条の7)などが適用されているケースもあり得ることから、単に地方税の納付状況だけを外形的に利用することについては、極めて慎重な検討が必要であること十分留意しつつ、出入国管理及難民認定法の所管省庁において検討を行うべき問題である。(地方税法上の規制は存在しない。)		「要望は、地域社会で日本人住民と外国人住民が、互いの文化や価値観に対する理解と尊重を深めながら、健全な都市生活に欠かせない権利の尊重と義務の遂行を基本とした真の共生社会(多文化共生社会)の形成を目指すものであることをご理解いただきたい。ご回答にあつては、地方税の納付状況を外形的に利用すること慎重になる必要があることは言うまでもない。本要望は、地方税の納付義務がある外国人について、国税の納付状況と合わせて在留資格の審査要件に加入することにより、義務の履行を担保させるためのものである。地域社会が外国人を住民として受け入れていくために、今後とも協力いただくことを希望する。」	外国人居住都市会議 議長 四日市市長 井上哲夫	1	A	在留資格の変更、在留期間の更新および永住者の在留資格への変更の際の在留管理の適正化	在留資格の変更又は在留期間の更新並びに「永住者」の在留資格への変更に当たっては、外国人が就労している場合、雇用・労働条件に法令違反がなく、社会保険に加入していること、国税及び地方税の滞納がないこと、学齢期の子どもがある場合の子どもが就学していること、在留資格によっては日本語能力の程度、などを審査項目に加え、それらの実施状況を正確に把握できる体制を整える。これらの実施が不十分又は法令違反がある場合、在留資格の変更又は在留期間の更新並びに「永住者」への在留資格への変更を認めず、市区町村や関係機関と連携して、その是正を図る。子どもが就学や日本語能力の程度を審査項目に加え、子どもに在留している外国人に、子どもの就学の機会や、本人の日本語学習機会を十分に提供するために、国の責任において必要な環境を早急に整備する。		[規制の現状]在留資格の変更又は在留期間の更新を受けようとする外国人は、法務大臣にこれを申請することができ、法務大臣は、当該外国人の提出した文書に基づいて、在留資格の変更を適当と認めるときに限り、これを許可することができる。また、在留する外国人が「永住者」の在留資格への変更(特別永住者を除く)を希望する場合、法務大臣は、素行が善良であること及び独立の生計を営むに足る資産又は技能を有すること並びにその者の永住が日本国の利益に適合すると認めるときに限り、これを許可することができる。なお、素行が善良であることを証明するために、国税の納付証明書の提出が義務付けられている。 [要望理由]日本に在留する外国人の権利を保障し、同時に義務の履行を図ることは、多文化共生社会を形成するために不可欠なことではない条件である。しかし、国内に合法的に在留していないが、その資金・労働条件が労働関係法令や出入国管理関係法令に定める条件を満たしているかどうかをチェックされず、社会保険加入、国税及び地方税の納入などの義務を十分に果たしていない場合がある。学齢期の子どもが就学を保障することは、保護者や受入国にとって義務的なものであり、これも十分に果たされていない。また、「永住者」の在留資格を取得した外国人が、社会保険に加入していない場合は少なくない。地方税の滞納についてもチェックされていない。さらに、日本語が不十分な場合、日本の各地域社会において、住民と共に暮らすことが困難になることも必要であると考えられる。これらの実現のために、在留資格の変更・更新及び「永住者」の在留資格への変更にあたって、法務省出入国管理局と市区町村及び関係行政機関は、「共用データベース」の構築などを通じて効果的かつ効率的に連携することが必要である。	出入国管理及び難民認定法第20条、21条及び22条、永住許可に関するガイドライン(法務省入国管理局平成18年3月31日)、地方自治法第10条	法務省出入国管理局、総務省自治行政課、自治税務局、厚生労働省労働基準局、厚生労働省労働政策局、文部科学省大臣官房、文部科学省中等教育課、財務省主税局、財務省自治行政局	
5046	5046001			z08010	総務省、財務省	郵便貯金法施行規則第10条及び第11条、簡易生命保険法施行規則第10条及び第11条	財政融資資金の長期運用に対する特別措置に関する法律第3条等に基づき、当該年度に運用しなかつたものについては、翌年度末まで運用が可能となっている。	c		地方公共団体に対する政府資金の貸付けにあつては、法律の規定により、繰越運用を翌年度まで認めているが、これは、貸付金利や償還期限などと同様の貸付条件のひとつであり、規制にあつたものである。事故繰越等により、地方公共団体が翌々年度において地方債を起債しようとする場合、既に許可を受けた資金区分が政府資金であるものについては、政府資金の借入れを受けられないこととなるが、当該地方債の資金区分を民間等資金に変更する手続きを経れば、民間金融機関等からの借入れは可能となるものであり、地方債の起債が規制されているわけではない。 なお、財政融資資金については、地方公共団体への貸付けに限らず、繰越運用を翌年度まで認める統一の取扱いとなっている。おつて、郵便貯金資金及び簡易生命保険資金の地方公共団体貸付けに関する制度は、郵政民営化により、平成19年度償還を終了し、制度自体が無くなること決定しているものである。	愛媛県松山市	1	A	事故繰越に係る地方債の借入れに関する規制緩和(明許繰越した事業が避け難い事故により事業の繰越を余儀なくされた場合、この事業の財源として予定している地方債の借入れを翌々年度まで可能とする。)	想定外の土質や天候(地震、豪雨等)等の避け難い事故により都市基盤整備を進めるに当たっては、地権者、関連団体等との調整により工期の延長を余儀なくされることがある。こうした事態に対応するため明許繰越により対応しているものの、想定外の土質や天候(地震、豪雨等)等の避け難い事故により事業の繰越を余儀なくされることがある。国の補助事業では、事故繰越の措置が認められているものの地方債については翌々年度の借入れは不可能とされており、事業の必要性、緊急性から中断や中止が可能な事業については、一般財源による措置が必要となり、耐用年数に応じた負担の公平性が損なわれるほか、財源対策に困難を強いられている。	公共事業により都市基盤整備を進めるに当たっては、地権者、関連団体等との調整により工期の延長を余儀なくされることがある。こうした事態に対応するため明許繰越により対応しているものの、想定外の土質や天候(地震、豪雨等)等の避け難い事故により事業の繰越を余儀なくされることがある。国の補助事業では、事故繰越の措置が認められているものの地方債については翌々年度の借入れは不可能とされており、事業の必要性、緊急性から中断や中止が可能な事業については、一般財源による措置が必要となり、耐用年数に応じた負担の公平性が損なわれるほか、財源対策に困難を強いられている。	-財政融資資金の長期運用に対する特別措置に関する法律第2条及び第3条、財政融資資金の管理及び運用の手続きに関する規則第27条及び第28条、郵便貯金法施行規則第10条及び第11条、簡易生命保険法施行規則第10条及び第11条	総務省、財務省	添付資料1-1-18			
5053	5053004			z08011	総務省	地方自治法第237条、第238条の4及び第238条の5	第237条 この法律において「財産」とは、公有財産、物品及び債権並びに基金をいふ。 2 第238条の4第1項の規定の適用がある場合を除き、普通地方公共団体の財産は、条例又は議会の議決による場合でなければ、これを交換し、出資の目的とし、若しくは支払手段として使用し、又は適正な対価なくしてこれを譲渡し、若しくは貸し付けしてはならない。 3 普通地方公共団体の財産は、第238条の5第2項の規定の適用がある場合で、議会の議決による場合でなければ、これを信託してはならない。	C-対応不可		地方公共団体の公有財産は、住民の福祉の増進等、公用又は公共的な性格を有しているものであり、その保有目的に応じた適切な管理が必要である。よつて、財産の効率的な活用の観点と照らし合わせ、一定のものについてはのみ信託を認めていることである。 上記の趣旨を十分に勘案しつつ、今後、地方自治法の改正により、普通財産及び基金に関する有価証券について貸付を目的とした信託を可能としたことである。 なお、地方自治法において信託が認められている範囲は、今回の改正により国よりもその対象が拡大されているものである。 また、地方公共団体においても、信託財産である建物等の一部を、当該地方公共団体が取得又は賃借する等により引き続き使用することは可能である。	社団法人信託協会	4	A	地方公共団体の保有する財産について流動化、証券化を目的とした信託設定を可能とすること	・地方公共団体が保有する財産は、行政財産、普通財産、物品及び債権並びに基金に分類されるが、普通財産である土地(及びその定着物)以外を信託すること認められていない。 ・普通財産である土地(及びその定着物)の信託についても、地方公共団体自身が受益者となる場合以外は認められておらず、さらに公用又は公共に供するためには必要が生じたときは信託期間中であっても信託契約を解除することができない。 ・地方公共団体が保有する財産全般について、流動化・証券化を目的とする信託設定を可能とすること、少なくとも国と同様に、行政財産を普通財産に用途変更した上で、信託を設定し、当該財産を引続き地方公共団体が使用する方式が可能とすることを要望する。	・地方公共団体の保有する財産について、信託設定による流動化が実現できれば、地方公共団体の資金調達手段の多様化、早期財政健全化に資する。 金銭債権については、既に信託による流動化と同様の経済動化事例が既に存在している。	地方自治法第237条、第238条の4及び第238条の5	総務省				
5056	5056003			z08012	総務省	平成18年3月13日発信 総務省通知(総務省通知第53号)「クレジットカードを利用した地方税の納付について」	当該通知により、クレジットカードを利用した地方税納付を導入するにあつて、地方団体において留意頂(べき事項)につき取りまとめで示したところ。	d		御指摘の通知については、地方税制を所管する立場としての総務省の考え方を示したものであり、地方団体において留意いただくべき事項である。(クレジットカードを利用した地方税の納付については自治体の判断と責任において行われるべきものであることはいずれでもない。)		「クレジットカード手数料の設定に伴う通知は、地方自治体自身におけるクレジットカード手数料設定の判断を妨げるものでないこと、及び当該手数料設定は自治体自身の判断で行って良いこと」を確認させていただいたこと	クレジットカード普及連絡会	3	A	地方税における「クレジットカード」の導入、阻害する要因の排除に関する件	地方税のクレジットカード決済導入にあたり、本年3月13日付で発信された総務省通知(以下「通知」)に「自治体自身の手数料率における制約」及び「ポイント付与に関する公平性の問題」が指摘され、自治体での検討が停滞している様子がみられる。 ゆえに、クレジットカード手数料の設定に伴う通知の位置付けが、あ(まで総務省の考え方を示したものであり、自治体自身におけるクレジットカード手数料設定の判断を妨げるものでない)ことについて確認させていただいたこと	全国道県道及び市町村における地方税のクレジットカードによる納付を推進することにより、税納付手段の多様化による納付率の向上と効率的な徴収の実現が期待される。また、ポイント付与による納付率の向上と効率的な徴収の実現が期待される。また、ポイント付与による納付率の向上と効率的な徴収の実現が期待される。また、ポイント付与による納付率の向上と効率的な徴収の実現が期待される。	平成18年3月13日発信 総務省通知(総務省通知第53号)「クレジットカードを利用した地方税の納付について」	総務省(自治税務局)		

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革/民間開放)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5057	5057112			Z08014	総務省 厚生労働省 経済産業省	消防法 高圧ガス保安法 労働安全衛生法 石油コンビナート等災害防止法	他法令の基準によっても危険物施設について同等以上の安全性が確保される場合は、整合化を図っていくこととしているほか、「石油コンビナートに係る保安四法の合理化・整合化促進に関する実務者検討委員会」における検討結果を踏まえて、様々な措置を講じている。	C	-	化学プロセスに適用される各法律については、各法令の目的により規制が設けられているため、装置ごとに1つの法律のみを適用することとはできない。 なお、保安四法については、申請書類の共通化や検討結果の相互活用等の合理化・整合化を図るため、「石油コンビナートに係る保安四法の合理化・整合化促進に関する実務者検討委員会」における検討結果を踏まえ、様々な措置を講じているところであるが、再度関係省庁において、石油精製事業者を交えて、更なる合理化・簡素化の必要性について検討を行うこととしている。 また、重複規制の例としてあげられている圧力タンクの水圧試験に係る基準に関しては、高圧ガス保安法又は労働安全衛生法との整合化が図られているところであるが、今後他法令の基準によっても危険物施設について同等以上の安全性が確保される場合は、整合化を図っていくこととしている。		(社)日本経済団体連合会	112	A	保安法令の重複適用の排除	装置を構成している個々の機器・設備が、複数の法令によって重複して規制を受けることのないよう、各法の適用範囲に係る基準を策定し、それらに関して、申請・届出書類の様式統一に止まらない合理化を実施すべきである。早期に措置することが困難な場合は、少なくとも、機器・設備に適用される適用法令を装置ごと一括して適用すべきである。 そのためには、まず改正・増設を伴わない変更(維持補修等)について、法令の重複適用を解消すべきである。さらに、以下の点についても検討すべきである。 設備設置・変更の許可制(事前審査型規制)から規定遵守状況を確認する方式(実行監視型保安規制)への移行 技術的事項(設備設置、検査等)に関する法令の性能規定化 国際整合性のとれた保安規制の整備	石油コンビナートに適用される保安諸規制は、法ごとに異なる省庁が所管するので、技術基準、申請、立会要件等が異なり、重複規制を招く。 例えば、石油精製、石油化学のプロセスは、貯蔵タンクを除きほとんどが気液混合の、大気圧を越える状態で、消防法、高圧ガス保安法または労働安全衛生法が複数適用され、許可申請・完成検査(落成検査)、検査記録の作成・保存等において、重複して行わなければならない。(高圧ガス保安法と労働安全衛生法は運用、適用区分されている。)	消防法 高圧ガス保安法 労働安全衛生法 石油コンビナート等災害防止法	総務省消防庁 危険物保安室 経済産業省 労働安全衛生局 厚生労働省労働基準局 安全衛生部安全課	こうした規制の重複は、技術基準の性能規定化を推進する上で妨げとなり、事業者は、基準の解釈と整合性の確保、申請手続き、検査への対応等、多大な負担を強いられる。		
5057	5057113			Z08015	総務省	石油コンビナート等災害防止法 第16条第4項 石油コンビナート等災害防止法 施行令第8条-第18条	特定事業者は、その自衛防災組織に、政令で定めるところにより、当該自衛防災組織がその業務を行うために必要な化学消防自動車、消火用薬剤、油回収船その他の機械器具、資材又は設備(以下「防災資機材等」を備え付けなければならない。	D	-	1. 防災資機材等の規定は消防戦術を考慮してその性能を定めているものであり、仕様規定とは考えていない。現に近年の技術進歩等により、防災資機材等については、種々の装置・機械器具が付加されているものが開発されており、要望により新技術の進歩に伴う資機材等の導入を消防戦術とセットで図ってきているところであり(参考)参照)。今後もこの手法により新技術の導入に対応することとしている。 また、その他特記事項の後段については、データ等の提出や説明等が具体的にされていないため、当方では承知していないところであるが、新たな提案があれば検討する余地はある。 2. なお、文章中「規制改革・民間開放推進3か年計画(再改定) (2006年3月31日閣議決定)」は、「規制改革推進3か年計画(再改定) (平成15年3月28日閣議決定)」の誤りであると認識されるが、その後、技術の進歩に伴う資機材等の導入要望は具体的には承知していない。 【参考】 遠隔装置を搭載している防災資機材等として大型高所放水車又は普通高所放水車における省力化(平成10年4月)、ホース延長用資機材等を搭載している資機材として大型化学消防車又は甲種普通化学消防車における省力化(平成10年11月)、代替措置しての大型化学高所放水車(平成11年1月)、3点セットの代替とする半固定液面下泡注入装置(平成11年3月)等がある。	(社)日本経済団体連合会	113	A	石油コンビナート等災害防止法の機能性規定化の推進	防災資機材の技術は急速に進歩しており、石油コンビナートの防災体制の高度化を図るため、現在の仕様規定から性能規定へと転換し、新技術の導入を可能とすべきである。 以下要望者再意見も踏まえて、再検討されたい。 「消防庁の消防戦術を企業に見せるのが望ましい。現在の、関係省令で個別の防災資機材について技術上の基準を仕様の定めているだけで消防庁の消防戦術との関係が企業には理解できない。」	防災資機材の技術は急速に進歩しており、石油コンビナートの防災体制の高度化を図るため、現在の仕様規定から性能規定へと転換し、新技術の導入を可能とすべきである。	石油コンビナート等災害防止法第8条、15条、16条 石油コンビナート等災害防止法施行令第7-13条、15条、16条、19条、20条 石油コンビナート等における特定防災施設等及び防災組織に関する省令	総務省消防庁 特殊災害室	防災資機材等の規定は仕様規定化されており、技術の進歩に即応した新技術の導入が極めて反映されにくい状態となっている。安全性や性能の検証、試験、シミュレーション、消火実績をデータで説明しても、仕様規定を満たしていないの理由で、新技術を導入できないことである。			
5057	5057114			Z08016	総務省	石油コンビナート等災害防止法 第18条第4項 石油コンビナート等災害防止法 施行令第8条	特定事業所に一定規模以上の屋外タンク貯蔵所がある場合は、自衛防災組織に大型化学消防自動車、大型高所放水車及び泡原液搬送車を備え付けなければならない。	C	-	1. 学識経験者、関係省庁、関係業界(石油連盟、石油化学工業会、電気事業連合会、社団法人日本鉄鋼連盟、独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構の代表)等から構成される「石油コンビナート等防災体制検討会」(委員長 平野千景(東京大学学長))において、平成15年10月20日に次のとおり提言されたことを受け、関係法令等の改正を行い、2セット目からの適用を行うこととなったところ。 浮き屋根式タンクのリング火災に対し、3点セット(大型化学車、大型高所放水車及び泡原液搬送車)の場合は、高所から放水するため、火点に対して正確に放射することが比較的容易であるが、5輪は地上から放射するため、その正確性が3点セットに比べ劣る。 3点セットは、例えば高所で発生したプラント火災に対し、地上2メートル以上の高所から有効放射が可能であること等、-5輪が有していない汎用性の高い性能を保有していることに加え、1セットのみの配備が義務付けられている事業所等において、その配備の必要性が高い等の理由から、複数の3点セットを保有する場合における2セット目以降の大型高所放水車との代替を可能とする。 2. 平成15年以降、その後の技術革新・開発の動向についての具体的な提示がない以上、現時点においては、1セット目からの適用を検討する状況はない。 3. また、-5型泡放射砲を担いでタンク上部に防災要員が上がり消火を行う際の安全性の確保に係るデータとは、従来から回答しているとおり、単に放射熱のことを考慮するだけではなく、火災の拡大及び屋根の次下等あらゆる可能性における防災要員の安全性の確保を担保するデータのことをいうものであるが、防災要員の安全性に関する新たな提示	(社)日本経済団体連合会	114	A	1-S型泡放射砲のリング火災への適用	リング火災の消火に対して、1セット目から大型高所放水車の代替として、1-S型泡放射砲の使用を認めるべきである。	タンクのリング火災に対し、消防自動車で地上から放射しても、フォームガムの火災状況や泡状況が保たれないため、殆どの泡が浮き屋根に落下することとなり、浮き屋根の沈下に繋がらねないなど、効率的な消火が困難である。 1-S型泡放射砲は、タンクのトップアングルに設置できるため、フォームガムの火災に対してコンボイの消火が可能であり、効率的な消火が可能となる。海外における実証事例では、消火に要する時間は、2-3分という結果もある。 また、1セット目からの適用に関して、防災要員がタンク上部に上がる際の安全性については、耐熱服を着用した自衛隊員の影響について実証データを得ており、また機材の設置についても、安全装置を備えたリフト・設置の実験を実施しており、1-S型泡放射砲による迅速かつ確実なリング火災の消火は可能と考えられる。 なお、消防庁「石油コンビナート等防災体制検討会」(2003年10月20日)は、1-S型泡放射砲の2セット目からの適用については、今後の技術革新または開発の動向に応じて、今後とも技術的な検討を継続していくこととする、という答申を纏めている。	石油コンビナート等災害防止法施行令第8条	総務省消防庁 特殊災害室	タンクのリング火災については、法令上3点セット(大型化学消防車、大型高所放水車、泡原液搬送車)で済ませようとする考えが示されている。複数の点セットを保有する場合、2セット目以降は、1-S型泡放射砲を大型高所放水車と代替することが認められているが、1セット目からの適用は認められていない。			
5057	5057116			Z08017	総務省	「危険物施設の変更工事」から完成検査等について、(平成11年3月17日消防庁通達消防第22号)	工事管理を含む保安に優れた体制を有することが実績からも明らかであると認められる事業所が行う一定の変更工事について、市町村長等は事業所の自主検査結果を活用して完成検査を実施することができることとしている。	C	-	近年の危険物施設に係る事故件数の増加傾向を踏まえ、重要な変更工事に関しては消防機関が現場に赴き安全のチェックを行うことは不可欠である。このため、市町村長等が実施する完成検査前検査や完成検査の際に自主検査結果を活用できる屋外タンク貯蔵所は、事故等の発生実態及び事故発生時の被害の重大性等の保安の観点から1,000k未満に限られているものである。 なお、規制改革・民間開放推進会議(再改定) (平成18年3月31日閣議決定)に基づき、安全の管理基準を満たす事業者において自主検査が可能となる認定制度・基準・事後措置について、安全の確保を前提に検討を行い、平成19年度を目途に結論を出す予定である旨、申し添える。	(社)日本経済団体連合会	116	A	消防法の認定制度の範囲拡大ならびに自主検査の導入	範囲の拡大 認定の対象を、屋外貯蔵タンクについては容量制限を撤廃し、完成検査、完成検査前検査(溶接検査、基礎地盤検査)、水蒸気検査および保安検査まで拡大すべきである。 自主検査の導入 さらに、上記の認定制度に自主検査を導入すべきである。 当面の措置として、事業者の検査結果で問題がない場合は、その時点で施設の低使用を可能とすべきである。	高圧ガス保安法では、所有者、管理者等の自己責任原則の下、自主検査が認められている。他方、消防法では認定事業者制度が導入されているが、認定の範囲の狭さや、求めらるる要件、提出資料の多さから現状ではリフトが十分とはいえない。さらに、事業者が検査を完了しても市町村長が交付する完成検査済書を得るまで、使用できない期間が長い。自主検査の導入 認定の対象を、屋外貯蔵タンクについては容量制限を撤廃し、完成検査、完成検査前検査(溶接検査、基礎地盤検査)、水蒸気検査および保安検査まで拡大すべきである。 自主検査の導入 さらに、上記の認定制度に自主検査を導入すべきである。 当面の措置として、事業者の検査結果で問題がない場合は、その時点で施設の低使用を可能とすべきである。	「危険物施設の変更工事」にかかわる完成検査等について、(平成11年3月17日消防庁通達消防第22号)	総務省消防庁 危険物保安室	範囲の拡大 消防法の認定制度では、屋外貯蔵タンクについてはその範囲が完成検査(ならびに完成検査前検査(水蒸気検査)に限定されている。その対象は1,000k未満のタンクに制限されている。自主検査の導入 完成検査の認定制度は、事業者自身が検査した結果を活用し、市町村長などが告示を判断することであり、高圧ガス保安法の認定制度のように、自ら検査を行った事業者が判断できない。			

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5057	5057117			z08018	総務省	消防法第2条	引火点250未満の引火点を有する引火性液体を危険物としている。	C		引火性液体に係る過去の火災事例の分析、実験結果の分析等を踏まえた検討が行われ、その結果引火性液体の引火点の上限に關し消防法が改正され、平成14年6月から施行されたものである。法改正の際の検討において、第3石油類・第4石油類の危険性が低いとは言えない状態にあるとされており、諸外国との地理的条件(東海地震等の大規模地震の発生危険性等)の違いを勘案すると、引火点の上限を93度とすることは危険物保安の観点から適当でない。			(社)日本経済団体連合会	117	A	引火性液体危険物の定義の見直し	引火性液体危険物については、国際基準と整合性を図り、引火点の上限を93度に引き下げるべきである。引火点区分については、国産で製造現場や消費現場を含む全ての段階において、世界共通で利用できる「GHS化学物質の分類および表示の世界調和システム」の採用が決定するなどであり、各国並に見直すべきである。		世界各国(英・仏・独・蘭・米等)の国内法では、100度前後を上限として、それ以上の引火点を有する物質に対して、引火性危険物としては規制を要せず、その管理は事業者の自己管理に委ねられている。他方、わが国では、規制に伴い、石油製品を消費する多くの産業において、貯蔵、製造、流通、管理等のコストが高み、負担となっている。「全国規模の規制改革及び市場化テストを含む民間開放要望」に対する各官庁からの両面書について、(2005年8月12日)では「日本における危険物保安の観点から、上限引き下げは困難とされているが、その根拠は不明確である。わが国も参加している関連のシステム「GHS化学物質の分類及び表示の世界調和システム」も2008年に採用が決定しており、危険物施設の火災事故と一般の火災事故の発生件数を比較し、また地震対策などの安全対策の推進状況を勘案しつつ、制度の国際整合性を図ることが望まれる。	消防法第2条	総務省消防庁危険物保安室	引火点の上限設定については、250度以上の引火性液体危険物は非危険物とされている。
5057	5057118			z08019	総務省	消防法第14条の3、第14条の3の2、第6項、第62条の5	特定屋外タンク貯蔵所においては、液体危険物タンクの底部の板の厚さに関する事項及び液体危険物タンクの溶接部に関する事項の検査を行わなければならない。	C		屋外貯蔵タンクからの漏えい事故は、金属材料の腐食劣化によるもの、地震等の外部応力によるもの等が考えられ、今後発生が予想されている大規模地震等における応力集中によるタンク破壊の要因となる可能性を有する溶接部欠陥についての検査を省略することはできない。なお、保安検査時においては、溶接部欠陥が毎年発見されている現状にある。			(社)日本経済団体連合会	118	A	タンク底板溶接部検査の省略	タンクの保安検査、内部点検は、底板溶接部の検査についてはタンク製作時または一度実施すればよいものとし、底板の厚さに関する検査のみとすべきである。		「全国規模の規制改革及び市場化テストを含む民間開放要望」に対する各官庁からの両面書について、(2005年8月12日)では、溶接部欠陥が今後発生が予想されている大規模地震等における応力集中によるタンク破壊の要因となる可能性を有するとされている。しかし、応力集中中に生じた脆性破壊が進展してタンクに至るまでの期間は、地震や通常の油の出入れに伴う累積損傷疲労を考慮して破壊力学的に計算しても、100年要するとの結果が得られている。また、両面書では保安検査時においては、溶接部欠陥が毎年発見されている現状にあるとされているが、そのような事実は認められていない。海外においては、タンクの溶接部を定期的に検査している国はなく、タンク製作時に全溶接部を一括して検査している国は少ない。	消防法第14条の3、第14条の3の2、第6項、第62条の5	総務省消防庁危険物保安室	タンクの底板溶接部については、開放検査ごとに溶接部探傷試験を実施することとされている。また、溶接部については、探傷試験(縦断とテーパー板の内面溶接継手、3枚重ね溶接継手及び三重点合せ溶接継手)についてコーティングを剥離し、検査を行うこととなっている。
5057	5057119			z08020	総務省	消防法第14条の3の2、高圧ガス保安法第35条の1、コンピナー等保安規則第14条	消防法第14条の3の2により定期点検を行わなければならない危険物施設は、1年に1回以上点検を行っている。	C		定期点検は危険物施設の安全のため、施設の位置、構造及び設備が技術上の基準に適合していることを点検するもので、特定の製造所等の所有者等に対し義務を課しているものであり、安全弁については原則として作動確認により1年に1回以上機能の適否を点検する必要がある。			(社)日本経済団体連合会	119	A	消防法および高圧ガス保安法が重複適用される安全弁の分解検査周期の見直し【新規】	高圧ガス保安法および消防法が重複適用される安全弁の分解検査周期は、高圧ガス保安法の周期である2年とすべきである。消防法の安全弁の作動検査については、2年に一度の分解検査で安全を担保することは可能である。現状、2年ないし4年連続運転した設備について、安全弁を取り外した直後に作動検査を実施して、問題の有無(規定どおり作動するか否か)を確認しているが、問題は、ほとんど発生していない。		高圧ガス保安法においては、安全弁の分解検査周期は、年(機器によっては4年)となっており、消防法においても整備を要するべきである。	消防法第14条の3の2、高圧ガス保安法第35条の1	総務省消防庁経済産業省原子力安全保安院保安課	消防法が適用される安全弁の分解検査周期が年であることに対して、高圧ガス保安法が適用される安全弁の分解検査周期は2年(機器によっては4年)となっている。したがって、両法規が重複して適用される安全弁の分解検査周期は、短い方の1年となっている。
5057	5057120			z08021	総務省	消防法第17条の3の3	消防用設備等については、消防法第17条に基づき、消防法施行令第6条及び別表第一に規定する防火対象物ごとに設置し、維持しなければならないとされている。消防法第17条の3の3	D		自主的に設置された消防用設備等の点検については、火災予防に係る行政上の目的を実現するため行政指導によりその実施を求める場合があるが、当該消防用設備等についての点検は消防法令上義務付けられていない。			(社)日本経済団体連合会	120	A	自主的に設置する消防用設備等における点検基準の緩和【新規】	消防法および消防法施行令に基づき消防用設備等の設置、維持基準を既に満足している施設において、さらに自主的に設置した自動消防設備等の消防用設備については、自主的な点検(点検項目、点検周期、点検報告等)で実施できるように点検基準を緩和すべきである。		「消防用設備等の設置基準」に基づいて当該消防用設備等を設置するに、自主的に自動消防設備等の消防用設備を設置している施設がある。当該消防用設備は告示の点検基準に基づき点検を実施し、消火性能等の維持に努めていることから、自主的に設置している自動消防設備等の消防用設備の有無に関わらず、既に消防法および消防法施行令の規定を満たした消火性能を有する施設となっている。そのため、自主的に設置した自動消防設備等の消防用設備については、自主的な点検(点検項目、点検周期、点検報告等)に基づいて設置責任者による点検を実施することが可能である。	消防法第17条、第17条の3の3、消防法施行規則第31条の6、消防法施行令第8条、第29条の4	総務省消防庁	山頂無線中継局舎等は消防法施行令第13条で定める自動消防設備(不活性ガス消火設備、ハロゲン化物消火設備等)を設置しなければならない施設には該当していない。しかしながら、消防法施行令第13条に該当しない山頂無線中継局舎等であっても、事業者が自主的に自動消防設備を設置している場合がある。この場合、自主的に設置した消防設備にも関わらず、消防法告示第9号と第14号に基づき点検を実施するよう指導されている。

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望事項別(規制改革/民間開放)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5057	5057121			Z08022	総務省		有線電気通信法第3条第2項に規定する有線電気通信設備については、同法第3条第1項の各号の事項のほか、その使用の態様その他総務省令で定める事項を併せて届け出ることとしている。 なお、本届出では、事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第2)中の「4 設備の概要、構造、使用の態様等」に記載する事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第3)に添付する「回線図」においては、回線図の内容が記載されている例が見られるため、「有線電気通信設備の届出に係る添付書類の取扱いについて(通達)」(郵電監第134号(昭和63年10月21日))において、双方に重複が生じないようにすることとしている。 また、回線図では、「回線図」に設備の概要の記載を行うことが好ましい場合、事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第2)中の「4 設備の概要、構造」回線図のとおり」と記載しても差し支えないとしている。	e	なし	「制度の現状」に記したとおり、要望事項は措置済みである。			(社)日本経済団体連合会	121	A	有線電気通信設備の届出における事項書の記載省略化	有線電気通信法第3条第2項に規定する「二人以上の者が共同して設置するもの」、「他人の設置した有線電気通信設備と相互に接続されるもの」、「他人の通信の用に供されるもの、のいずれかで有線電気通信設備を設置する場合の届出の事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第2)において、「設備の概要」の記載を省略すべきである。	事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第2)の「設備の概要」の項目に記載する「交換機」、「増幅器又は光電変換機」、「保安装置」、「線路、および」電柱」の種類については、事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第3)に添付する回線図に記載することで設備の構成と種類を把握することが可能であることから、事項書(有線電気通信法施行規則の別紙様式第2)に記載する「設備の概要」については記載を省略しても問題がない。	有線電気通信法第3条、第3条の2項、有線電気通信法施行規則別紙様式第2、別紙様式第3	総務省総合通信基盤局電気通信事業部事業政策課	有線電気通信設備が「二人以上の者が共同して設置するもの」、「他人の設置した有線電気通信設備と相互に接続されるもの」、「他人の通信の用に供されるもの、のいずれかに該当する場合、有線電気通信法第3条第2項に基づき、同法第3条第1項に規定する「有線電気通信の方式の別」、「設備の設置の場所」、「設備の概要」の事項のほか、その使用態様その他総務省令で定める事項を併せて総務大臣に届け出なければならない。	
5057	5057122			Z08023	総務省		有線電気通信設備を設置した者は、有線電気通信法第3条第1項各号の事項若しくは同法第2項に該当しない設備をこれに該当するものに変更するとき、又は同項に規定する設備に該当しない設備をこれに該当するものに変更しようとするときは、変更の工事の開始の日から二週間前まで「工事を書きしない」とし、変更の日から二週間以内に総務大臣に届け出なければならない。	c	なし	有線電気通信法第3条第3項に規定する有線電気通信設備の変更届出は、設置する有線電気通信設備の使用の態様を変更する際にも必要としている。変更理由において、「工事を書きしない」ときは、実態には、届出者の法人格が同一のまま、単なる社名変更、事業所名称変更および住所記載変更のみである」とあるが、有線電気通信設備の工事を書きしない使用の態様を変更することが想定されるため、「有線電気通信設備の変更において、当該設備の工事を書きしない場合には、届出不要」とすることは不適当である。	「有線電気通信設備の変更において、当該設備の工事を書きしない場合には、届出不要」とすることを要望したものであるが、回答にある「有線電気通信設備の工事を書きしない使用の態様を変更することが想定される(ため、不適当である)」とは、どのような事象を想定しているのかを具体的に示さずして頂きたい。 「工事を書きしない」とは、再度、貴省からの回答を頂きたい。 「工事を書きしない有線電気通信設備の変更とは、実質的に有線電気通信設備の使用の態様を変更せず、届出者の法人格が同一のまま、単に社名や事業所名称、あるいは住所表記等を変更する場合のことであり、有線電気通信設備の使用の態様を変更する場合は、実工事が発生するため、有線電気通信法および関係法令に基づいて届出を行う必要があると認識している。 このため「有線電気通信設備の変更において、当該設備の工事を書きしない場合には、届出不要」とすることを要望したものであるが、回答にある「有線電気通信設備の工事を書きしない使用の態様を変更することが想定される(ため、不適当である)」とは、どのような事象を想定しているのかを具体的に示さずして頂きたい。	(社)日本経済団体連合会	122	A	工事を書きしない有線電気通信設備の変更における届出の廃止(新規)	有線電気通信設備の変更において、当該設備の工事を書きしない場合には届出不要とすべきである。	工事を書きしないときの変更とは、実態には、届出者の法人格が同一のまま、単なる社名変更、事業所名称変更および住所表記変更のみであることから、この場合の変更については届出不要とし、変更元の法人格が一般的に取引先や関係会社等に社名や住所等の変更を案内する文書等を総務省等関係機関へも案内することで変更届の取扱い、その案内を既に申請している届出書に添付することで手続の簡素化が可能である。	有線電気通信法第3条	総務省総合通信基盤局電気通信事業部事業政策課	有線電気通信設備の届出事項を変更しない場合において、工事を書きしない届出を必要としない場合に、変更の日から二週間以内に総務大臣に届け出なければならない。		
5057	5057123			Z08024	総務省		電気通信役務利用放送の業務を行うにあたっては、電気通信役務利用放送の種類を記載した申請書を提出して総務大臣の登録を受けなければならない。電気通信役務利用放送法第3条及び電気通信役務利用放送法施行規則第4条。 MNVOとは、MNVOの提供する電気通信役務としての移動通信サービスを利用して、移動通信サービスを提供する電気通信事業者であって、当該サービスに係る無線周波数を自ら開設していない者である(MVNOに係る電気通信事業法及び電波法の適用に関するガイドライン)。また、電気通信役務利用放送に利用する電気通信役務に特段の制限はなく、MNVOが提供する電気通信役務を利用することも可能である(電気通信役務利用放送法第1条)。	c	d	総務省としては、これまで、2.6GHz帯衛星デジタル音声放送等、新たに登場した移動向け放送サービスの制度化に取り組みできたところ。 他方、電気通信役務利用放送法のスキームで行われる移動向け放送サービスについては、現時点において電気通信業務用の周波数を使用している放送サービスのニーズが顕在化しているとは承知しておらず、また具体的な当該放送サービスに係るシステムの提案についても認識していない。 このため、移動向け放送サービスを電気通信役務利用放送法の対象に含めるか否かという制度的な見直しを検討する前に、当該サービスの有無、当該放送サービスに係るシステム等、様々な課題を模索し、見極めることが必要である。 なお、移動体端末向けの電気通信役務利用放送についての考え方は前記のとおりであるが、一般的に、電気通信役務利用放送を提供する場合において、他の電気通信事業者が提供する電気通信役務を利用することについて特段の問題は存在しない。		「当該サービスの有無、当該放送サービスに係るシステム等、様々な課題を模索し、見極めることが必要」とのことであるが、検討のスケジュールにつき、明示されたい。	(社)日本経済団体連合会	123	A	移動体向け放送サービスの提供に伴う法制度・ガイドラインの見直し(新規)	電気通信役務利用放送法及び総務省令で定める電気通信役務利用放送、移動体向け放送も含まれるべきである。 「放送サービス」提供の場合のMNVOに対し、インフラ/サービス提供が公正に行われるようガイドラインを見直すべきである。	通信インフラを利用した移動体利用者向けの「放送サービス」は、用いられる技術等は「通信」に該当するが、実際のサービスは不特定多数が同時に同じ情報を受取る「放送サービス」である。放送事業者が「移動体サービス」において「放送サービス」を行うことを法制上も担保することで、移動体向けサービスの多様化及び新たなビジネス創出につながると考える。 また、放送事業者が「通信インフラ」技術を用いた「放送サービス」の実施を希望しても、実際に通信設備を保有する通信事業者が設備の提供を行わなければ、「放送サービス」の提供は困難である。放送サービスの多様化及び新たなビジネス創出を促進し、幅広い移動体向け放送サービスを実現するためには、自ら通信インフラを所有しない放送事業者が、既存及び新規通信事業者からインフラサービスの貸借を受けてサービス提供が可能な制度環境が必要である。そこで、通信設備を保有する通信事業者から、「放送サービス」を希望するMNVOに対して設備の提供が公正に行われるよう、ガイドラインを見直すべきである。	電波政策ビジョン(2003年7月) 周波数の再編方針(2003年10月) 周波数再編のアクションプラン(2004年8月、2004年10月) 電波法、電気通信事業法、電気通信役務利用放送法、放送法、MNVOに係る電気通信事業法及び電波法の適用に関するガイドライン(2004年4月)	総務省総合通信基盤局電気通信事業部データ通信課	総務省は、世界最先端のワイヤレスブロード環境を構築するため、周波数の再編計画を行っている。中でも、移動体サービス向けに1.7GHz帯及び2GHz帯で社に周波数割当を行い、また今後2.6GHz帯や700MHz帯、15GHz帯でも周波数の割当を行う予定である。こうした新規移動体通信サービスにおいて、不特定多数が同時に情報を受取る「放送サービス」が計画されているが、電気通信役務利用放送の対象は衛星放送及びケーブルテレビ放送であり、移動体サービスが含まれていないため放送としてのサービス提供を行うことができない。また、通信インフラを持たない放送事業者がMNVO(仮想移動通信事業者)としてサービス提供を行うことも想定されるが、現行のガイドラインは放送事業者による移動体サービスを提供しているため、放送事業者がMNVOとしてサービス提供を行うことが出来ない。	
5057	5057124			Z08025	総務省		電波法第38条の24、第38条の26、第38条の31 特定無線設備の技術基準適合証明等に関する規則第20条、第36条、様式第7号 総務省告示第400号(15.7.1)	C	-	既に認証を受けた小電力データ通信システム(無線LAN)のアンテナを新たなアンテナに変更した場合の無線設備の技術基準への適合性について、認証を不要とするということは、第三者による適合性評価を不要とし、自らが確認すればよいということにするということである。 小電力データ通信システム(無線LAN)については、市場調査を実施した結果、技術基準適合機器が概ね十分な割合で発生している状況であり、製造業者等により適正な機器が市場に供給されるよう、今後の改善状況を注視していく必要があるところである。 このような状況において、新たなアンテナに変更した場合の無線設備の技術基準への適合性について、第三者による適合性評価を不要とし、自らが確認すればよいということにするのは適当ではない。 表示における番号については、技術基準適合機器が現れた場合に、迅速かつ確実に製造業者、機種等を特定し、必要な措置を講じるために非常に重要なものであり、これを軽視することは適当でない。なお、具体的な要望内容の中の第2文については、以前の回答の趣旨は、無線設備の当初の認証の際にその無線設備のアンテナとして技術基準を満たすものが複数想定されている場合に、それらをまとめて認証を受けることにより、アンテナごとに認証を受けることを省略化することができるということである。	要望者より以下のとおり再意見が来ており、再度、貴省からの回答を頂きたい。 「無線設備の当初の認証の際にその無線設備のアンテナとして技術基準を満たすものが複数想定されている場合に、それらをまとめて認証を受けることにより、アンテナごとに認証を受けることを省略化することができる」ということである。例え、既認証において認められている利得より小さいなど、一定の条件下で新たなアンテナを接続する場合には、再度の認証を不要とするか、あるいは認証の対象としても認証番号の変更は不要とすべきである。また、再度の認証が不要とされている、「当初の認証の際に一定の条件を満たす空中線が想定されている」事例について明確にすべきである。	(社)日本経済団体連合会	124	A	小電力データ通信システムの無線局における空中線の追加認証手続の見直し(新規)	新たなアンテナの追加に伴い、企業はその都度、認証費用を払い、認証を新たな認証番号を製品に表記しなければならない。大変なコストと手間が伴うこととなり、新製品の市場投入が遅れることとなる。 認証の際に一定の基準を満たす空中線が想定されている場合は、それらを含めて当初に認証を受けることで、再度の認証を不要とするもの、「一定の基準」が明確ではないため、実務上、機種が変わる毎に、新たな認証番号を再取得せざるを得ない。 また、海外では多くの国がアンテナの変更による新たな認証を不要としている。	電波法第2条、第36条、特定無線設備の技術基準適合証明等に関する規則第8条、第20条、第27条、第36条	総務省総合通信基盤局電気通信事業部電波環境課	技術基準適合証明等の認証を受けた無線設備について、変更の工事がなされた場合には、変更前の認証等は効力を有しない。ただし、当初の認証の際に一定の基準を満たす空中線が想定されている場合は、それらを含めて当初に認証を受けることで、再度の認証を不要とすることが可能である。認証番号についても、当初の番号を変更せずに使用される。 既に認証済みの無線LAN製品について、新たなアンテナ(空中線)を接続し、使用する場合は、該当の無線デバイスに新たなアンテナの規格を追加するということで、認証番号を再取得し、これにより変更された認証番号を製品に表記しなければならない。			

全国規制改革及び民間開放要望書(2006あじさい)

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)	
5057	5057125			208026	総務省	地方税法第317条の6、同法第321条の4、同法施行規則第10条	個人住民税の課税資料となる給与支払報告書等は市町村長に提出することとされており、特別徴収税額通知書は市町村長の名前で通知することとされている。	d	一連の手続については、紙媒体による書面ではなく、電子データでの授受を原則とすべきとの要望について… 窓口組織を設定し、そこでデータの取り纏めを行うようにすべきとの要望について…	地方税法は、市町村住民税特別徴収の手続を書面によるものに限定しておらず、これを電子化することは、現行法制度上既に可能である。この手続を電子化するについては、地方公共団体が費用対効果等を判断し、必要に応じて適切に行っているものと認識している。また、給与所得者異動届出の電子データ化・電子納税等についても、下記のとおり(社)地方税電子化協議会において検討が行われている。 (社)地方税電子化協議会において、地方税ポータルシステムは、現在、法人住民税、法人事業税及び固定資産税(償却資産)の電子申告手続が実施されている。おいて、これらの税目の申告手続のみならず、納税者の利便性の向上を鑑みながら各種申請・届出・納税手続まで組み込まれていく予定である。総務省としては、今後とも、各地方公共団体における地方税の電子化に係る取組みを支援してまいる所存である。		各地方公共団体における地方税の電子化取組みに関して、総務省による具体的な支援内容をお示しいただきたい。	(社)日本経済団体連合会	125	A	住民税にかかる諸手続きの電子化および窓口の一本化(新規)	一連の手続については、「紙媒体による書面」ではなく、電子データでの授受を原則とするべきである。窓口組織を設定し、そこでデータの取り纏めを行うようにすべきである。			紙媒体で送付されているデータを電子データに変えることで、企業・各地方公共団体双方の事務処理負担が軽減される。 その際、単に紙を電子データに置き換えるだけで、地方公共団体ごとに手続を行うことではメリットが薄減する(全国展開している企業の場合、対象となる市区町村等が百にも及ぶため、窓口となる組織(ポータルサイト)を設定し、地方公共団体から送付されたデータを企業毎に集約するとともに、企業から全地方公共団体分について一括送付されたデータを地方公共団体毎に振り分ける処理を行うことが必要である。	地方税法第13条、第317条の6、第321条の5、地方税法施行規則第9条の5、第10条	総務省自治税務部企画課、各地方公共団体税務担当課	住民税にかかる特別徴収の手続きは、地方公共団体ごとに「原則」として書面の受け渡しにより行われている。 「市民税・県民税、特別徴収税額の通知書」の地方公共団体から企業への送付「給与支払報告書」の企業から地方公共団体への送付「給与所得者異動届出書」の企業から地方公共団体への送付 「特別徴収税額通知書」の企業から従業員への授受 納税
5057	5057126			208027	総務省	地方税法第362条、第364条、第383条	現在、地方団体が組織する(社)地方税電子化協議会において、地方税関係手続の電子化を推進し、又全国共通のポータルシステムが運営されているところである。	d		地方税法は、固定資産税の納付手続を書面によるものに限定しておらず、これを電子化することは、現行法制度上既に可能である。この手続を電子化するについては、地方公共団体が費用対効果等を判断し、必要に応じて適切に行っているものと認識している。 (社)地方税電子化協議会において、地方税ポータルシステムは、現在、法人住民税、法人事業税及び固定資産税(償却資産)の電子申告手続が実施されている。おいて、これらの税目の申告手続のみならず、納税者の利便性の向上を鑑みながら各種申請・届出・納税手続まで組み込まれていく予定である。総務省としては、今後とも、各地方公共団体における地方税の電子化に係る取組みを支援してまいる所存である。		各地方公共団体における地方税の電子化取組みに関して、総務省による具体的な支援内容をお示しいただきたい。	(社)日本経済団体連合会	126	A	固定資産税の納付手続きの電子化推進	固定資産税の納税通知書、課税明細書の交付、納付手続きならびに償却資産税の申告手続きの電子化を推進すべきである。その際には、入力フォーム、入力手順などの仕様(インターフェイス)の標準化を図るべきである。 現在、電子自治体システムの共同化に向けた取組みが行われているが、納税者の利便性向上の観点から、全ての市町村で電子納税が行えるよう、汎用システムの導入を早期に図るべきである。	地方税法第362条、第364条、第383条	総務省自治税務部企画課、各地方公共団体税務担当課	固定資産税の納税義務者は、交付された納税通知書、課税明細書に基づき、各市町村が定めた納付書により、各事業所等が存在する市町村に対して、税金を納めなければならない。 固定資産税の納税義務がある償却資産の所有者は、毎年、償却資産課税台帳の登録および当該償却資産の価格の決定に必要な事項を所在地の市町村に申告しなければならない。			
5057	5057127			208028	総務省、国土交通省	地方自治法施行令第167条の11	第167条の11 第167条の4の規定は、指名競争入札の参加者の資格についてこれを準用する。 2 普通地方公共団体の長は、前項に定めるもののほか、指名競争入札に参加する者に必要な資格として、工事又は製造の請負、物件の買入れその他当該普通地方公共団体の長が定める契約について、あらかじめ、契約の種類及び金額に応じ、第167条の5第1項に規定する事項を要件とする資格を定めなければならない。 3 第167条の5第2項の規定は、前項の場合にこれを準用する。	C.対応不可		地方公共団体における入札参加資格に関する具体的な基準の決定は、各地方公共団体に委ねられているところであり、国の関与により入札参加資格審査申請書等の様式を全国統一とすることは困難であるが、地方公共団体の自主的な検討と判断の結果、様式の統一や手続の共通化が図られることは、申請者の負担軽減の観点から望ましいものと考えられる。総務省としても、これまで国において各省申し合わせにより統一様式が定められた際には、各地方公共団体における取組の参考となるようこれを周知してきたところであり、今後も国の動向等を踏まえつつ、適宜対応を検討することとしたい。		様式の統一化や手続の共通化は申請者負担の軽減から望ましいものであることは貴省も認められているところであり、国が一定の方向性を示して地方公共団体による様式の統一化や手続の共通化の取組を後押しすることは否定されるべきものではないと考えられる。そこで、様式の統一化や手続の共通化の推進について地方公共団体に対し技術的助言をすることができないかという観点から改めて御検討の上、御回答いただきたい。	(社)日本経済団体連合会	127	A	公共工事指名願に関する諸手続き等の統一	政府として、各地方公共団体における「公共工事指名願」の様式を統一すべきである。を行った上で、各地方公共団体におけるオンライン手続きを共通のものとするべきである。	各地方公共団体の指名願の様式等に関する連携	国土交通省大臣官房地方課、総務省自治行政局	公共工事指名願(指名競争入札参加資格申請書)について、国土交通省は統一様式を規定しているが、現状では地方公共団体により様式にかなり違いがある。特に、資格所得科目、職目の分種等の様式がまちまちであり、逐一調査する必要がある。 また、電子申請についても、それぞれの地方公共団体が独自の形式をとっている。			
5057	5057136			208029	総務省	地方自治法第237条、第238条の4及び第238条の5	第237条 この法律において「財産」とは、公有財産、物品及び債権並びに基金をいう。 2 第238条の4第1項の規定の適用がある場合を除き、普通地方公共団体の財産は、条例又は議会の議決による場合でなければ、これを交換し、出資の目的とし、若しくは支払手段として使用し、又は適正な対価なくこれを譲渡し、若しくは質し付けてはならない。 3 普通地方公共団体の財産は、第238条の5第2項の規定の適用がある場合で、議会の議決によるときでなければ、これを信託してはならない。	C.対応不可		地方公共団体の公有財産は、住民の福祉の増進等、公用又は公共的な性格を有しているものであり、その保有目的に応じた適切な管理が必要である。よって、財産の効率的な活用を観点とし、若しくは質し付けてはならない。 上記の趣旨を十分に勘案しつつ、今般、地方自治法の改正により、普通財産及び基金に属する有価証券について貸付を目的とした信託を可能としたところである。 なお、地方自治法において信託が認められている範囲は、今回の改正により国よりもその対象が拡大されているものである。 また、地方公共団体においても、信託財産である建物等の一部を、当該地方公共団体が取得又は質借する等により引き続き使用することは可能である。		地方公共団体の保有する財産全般について、信託設定による流動化が実現されれば、地方公共団体の資金調達手段が多様化され、財政の早期健全化に資すると考えられることから、行政財産を含めた財産全般について、流動化・証券化を目的とする信託設定を可能とすることを改めて要望するので、再度検討のうえ見解を示されたい。	(社)日本経済団体連合会	136	A	地方公共団体の保有する財産の流動化・証券化を目的とした信託設定の容認(新規)	地方公共団体が保有する財産全般について、流動化・証券化を目的とする信託設定を可能とすべきである。少なくとも国と同様に、行政財産を普通財産に用途変更した上で、信託を設定し、当該財産を引継ぎを地方公共団体を使用する方式を可能とすべきである。	地方公共団体の保有する財産について、信託設定による流動化が実現すれば、地方公共団体の資金調達手段が多様化・早期財政健全化に資する。 金融債権については、既に信託による流動化と同様の経済効果が期待されるローン・パーティシパーション方式での流動化事例が既に存在している。 政府は、地方公共団体が保有する有価証券の信託を可能とすべく、地方自治法の改正法案第164回通常国会に提出している所であるが、保有財産全般について、流動化・証券化目的での信託を可能とすべきである。	地方自治法第237条、同第238条の4及び第238条の5	総務省	地方公共団体が保有する財産は、行政財産、普通財産、物品及び債権並びに基金に分けられるが、普通財産である土地(及びその定着物)以外を信託することは認められていない。普通財産である土地及びその定着物の信託についても、地方公共団体自ら受益者となる場合以外は認められておらず、さらに公用又は公共の用に供するために必要が生じたときは、信託期間中であっても信託契約を解除することができることとされている。 一方、国においては、行政財産を普通財産に用途変更した上で、信託を設定し、当該財産を引き継ぎ国が使用する方式が認められると解されている。		

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望事項別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5057	5057139			208030	全省庁	国・民法第466条	国:要望事項については、平成17年4月から債権譲渡対象を特定目的会社等にて拡大した。	国・d	-	国・d	*総務省では既に措置済み	要望主体から「各省庁及び地方自治体において、統一かつ早急な対応を要望されていることに関し、貴省の見解を確認されたい。」	(社)日本経済団体連合会	139	A	国・地方公共団体向け金銭債権の証券化に係る譲渡禁止特約の解除	各省庁・地方公共団体向け金銭債権につき、速やかに譲渡禁止特約を廃止すべきである。そのため、各省庁共通のルール(譲渡先が金融機関の場合は債権譲渡禁止特約の適用除外とする、事前承認手続を大幅に簡素化する、債権譲渡に対する取扱いを統一する)を策定し、売買契約・譲渡契約に反映すべきである。地方公共団体についても同様の統一した取扱いをすべきである。		資産流動化を促進する上で、債権譲渡禁止特約の存在が障壁となっている。債権譲渡禁止特約の廃止に向けて、各省庁・地方自治体が共通ルールの下で着実に取り組むことが求められる。		全省庁・地方公共団体	国の機関及び地方公共団体向け金銭債権については、譲渡禁止特約が付されていることが多く、当該金銭債権の証券化等を行うことができない。近年、一部の省庁においては事前に承認を得ることにより譲渡を認めたり、特定の譲渡先については債権譲渡禁止条項適用の例外とする等、企業における先掛債権を活用した資金調達の支援・促進が図られている。しかしながら、依然として省庁による対応のバラツキ、事前承認手続の煩雑さ、不透明さ等の問題が残されている。
5057	5057190			208031	総務省	地方税法第70条の6、第70条の15、地方税法施行令第56条の7、第56条の8	免税軽油使用者証の有効期間(現行:2年間) 免税証の有効期間(現行:1年間) 免税証の元売会社への提出単位の緩和(都道府県税務当局の判断)	0	-		軽油引取税の課税免除手続のあり方を検討するに当たっては、課税免除の対象事業者・用途全体を勘案し、免税軽油の不正使用(脱税)防止の観点を中心に置きながら、厳格に対応することとする。課税免除手続に関しては、具体的には、平成16年度版改正において、免税軽油の不正使用が疑われる事例が散見されることを背景として、免税証の不正受給等に係る罰則を強化したほか、免税軽油を不正に使用した免税軽油使用者に係る免税軽油使用者証の返還義務を規定するなどしたところである(なお、平成17年度・18年度においても、脱税防止対策の強化に係る税制改正を行っている。)。本件要望については、「電気供給業を営む者」に係る課税免除措置について、その手続を緩和するといったものであるが、課税免除手続を取り巻く上記のような現状にかんがみれば、要望にあるように課税免除手続を緩和することは困難である。	(社)日本経済団体連合会	190	A	軽油引取税の免税手続の緩和(新規)	以下の3点を措置すべきである。 免税軽油使用者証の有効期間(現行:2年間)の延長 免税証の有効期間の延長 免税証の元売会社への提出単位の緩和(少なくとも月単位)	地方税法第700条の15、地方税法施行令第56条の7	総務省自治税務局都道府県税課各道府県税務所	火力発電所で使用する助燃用軽油は、当該発電所が所在する道府県税務所へ申請し、「免税軽油使用者証」の交付を受けた後、同じく都道府県税務所へ申請、「免税証」の交付を受け、交付を受けた免税証を軽油購入の際、購入先の登録特別徴収義務者である元売会社に提出することで免税となる。現状、軽油を購入する電力会社は軽油納入量を月単位、短い場合は日単位で集計の上、元売会社に免税証を提出している。提出単位は、各道府県税務所の行政指導により異なる。取引の都合、提出を求められる場合もあり、非常に事務が煩雑になっている。免税軽油使用者は、免税軽油引き取り報告の義務を負うとともに、使用しなかった免税証は返納しなければならない。			
5057	5057192			208032	総務省	消防法第10条 危険物に関する政令第10条 平成11年6月2日消防庁通知第53号	ナトリウム-硫黄電池を設置する一般取扱所については、位置、構造及び設備の技術上の基準の特例が認められている。	C	-		一般取扱所と貯蔵所では、その施設形態、危険物の取扱形態等が異なることから、同様の特例を適用することはできない。	(社)日本経済団体連合会	192	A	ナトリウム-硫黄電池の保管における規制緩和	ナトリウム-硫黄電池は、密閉した単電池を複数組み合わせたもの(以下モジュール電池)であり、危険物保安技術協会で型式認定され、高い安全性を有することが確認されている。 この型式認定されたモジュール電池を保管する場合には、上記の危険物屋内貯蔵所の規制内容のうち、「保有空地の確保」・「消火設備の設置」について、以下のように規制を緩和すべきである。 保有空地：(現行「最低10m」)「最低3m」に消火設備：(現行「第3種消火設備」)「第5種消火設備」に	(*)その安全性は同等であるため、「保管」についても規制を緩和すべきである。	2010年に向けたCO2削減目標達成のための有効な手段として、風力発電等の自然エネルギー発電にナトリウム-硫黄電池の供給が計画されるなど、同電池に期待される役割は大きくなっている。 今後、大規模の電池設置案件(20MW～50MW規模)が増え、短期間に設置工事を実施するためには、設置場所の近傍にナトリウム-硫黄電池の保管場所を確保することが必要となる。 ところが現状、危険物屋内貯蔵所の規制を満足する保有空地や消火設備等を有する既存倉庫は種類に少なく、保管場所の確保が難しい状況にある。今後の普及促進に向け、ナトリウム-硫黄電池の保管に既存倉庫を有効活用することは、大規模案件の円滑な建設および経済性の面から、不可欠の条件となってくる。 危険物保安技術協会により型式認定されたナトリウム-硫黄電池の設置に用いるには、既に、消防法上の危険物一般取扱所規制について以下の緩和の特例が認められている(消防法第53号)。 保有空地：(現行「最低5m」)「最低3m」に消火設備：(現行「第3種消火設備」)「第5種消火設備」に 型式認定されているナトリウム-硫黄電池であれば、(*)	消防法第10条 危険物の規制に関する政令第10条 平成11年6月2日消防庁通知第53号	総務省消防庁危険物保安室	ナトリウム-硫黄電池は、消防法で規定された危険物(ナトリウム:第3類、硫黄:第2類)を用いているため、これを保管する場合は消防法の「危険物屋内貯蔵所」について規制を受ける。主な規制内容は以下の通り。 保有空地の確保：貯蔵所の周囲に最低10mの保有空地が必要 指定数量の倍数が200以上の場合は、第3種固定消火設備(CO2消火設備等)が必要 建屋構造、床面積等… 内容略	
5057	5057199			208033	総務省	(WTO)政府調達に関する協定(1996年)	1996年1月1日に発効した世界貿易機関(WTO)「政府調達に関する協定」は、政府機関等による商品、サービスの調達に、内国民待遇、内外無差別の原則を適用し、また、政府調達に手続の透明性を確保することを定めている。我が国においては、同協定付属書「付表」において約束している中央政府機関、地方政府機関(7都道府県及び12政令指定都市)、特殊法人及び独立行政法人による調達に同協定が適用される。	-	-		WTO政府調達協定は、公正、公開かつ競争的な政府調達を促進するための国際ルールである。我が国は、同協定締約国間の権利及び義務の均衡並びに同協定に定める相互に合意された適用範囲に基づき、内外無差別等の原則に則った政府調達を行っており、我が国が同協定付表にて約束している機関については、同協定を誠実に遵守している。これらの機関を協定適用機関から除外するためには、同協定に定める手続により所要の通報を行ったうえで、各締約国からの異議申し立てがないことが条件となるものであり、我が国の規制改革に対する枠組みの中で捉えられるものではない。 なお、我が国は、平成14年7月20日NTT再編に伴い、NTTの承継会社の1つであるNTTコミュニケーションズ社は同協定の対象機関としない旨の通報を、同協定の手続に従ってWTO政府調達委員会を通じ各締約国に対して行ったところ、これに対して米国、EC、カナダから異議申し立てが行われた。それ以降、同社が協定の除外基準を満たしていることについて同委員会や各種協議の場を通じて重ねて説明を行ってきた結果、米国及びカナダは異議を撤回したものの、依然ECが異議を撤回しているところ。数年にわたりWTO政府調達委員会合及2国間協議の場で我が国はECに対し異議の撤回を求め、本年7月にもECに対し及びWTO政府調達協議の場において撤回を要求したところ、今後とも取り組みを継続していきたい。	(社)日本経済団体連合会	199	A	WTO政府調達協定の適用対象機関からNTTグループ各社の除外	NTTグループ各社(NTT持株会社、NTT東日本、NTT西日本、NTTコミュニケーションズ)、中でも完全な民間企業となつてはNTTコミュニケーションズを、政府調達に関する協定の適用対象機関から除外すべき重要な措置を講じるべきである。	NTTグループ各社は、通信業界におけるグローバルな競争が急速に進んでいる中で機動的な事業展開を余蘊なされず、また経営努力により一層の合理化、コストダウンを求められている。こうした状況において、NTTグループ各社は民間企業であるにもかかわらず、政府調達協定の対象機関として、画一的な調達手続の適用が義務付けられている他、規定された調達状況報告のための集計作業に多大な業務が必要となるなど大きな負担を強いられている。	政府調達に関する協定(1996年)	総務省総合通信基盤局電通通信事業部事業政策課	NTTグループ各社は、民間化された市場の監視を受けているにもかかわらず、「WTO政府調達に関する協定」において、中央政府、地方政府及び他の特殊法人と並んで同協定の適用対象機関として定められ、協定で定める手続に従って調達手続きを進めることが義務付けられている。 また、我が国は、自主的措置としての、政府調達における供給者の利便性向上等の観点から、「物品」に係る政府調達手続等、等を定めており、協定対象機関は、より詳細かつ対象範囲が広い調達手続きが求められている。		

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望事項(規制改革/民間開放)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5057	5057210			208034	総務省	地方自治法第244条の2	第244条の2 普通地方公共団体は、法律又はこれに基づく政令に特別の定めがあるものを除く(ほか、公の施設の設置及びその管理に関する事項は、条例でこれを定めなければならない。) 2 普通地方公共団体は、条例で定める重要な公の施設のうち条例で定める特に重要なものについて、これを廃止し、又は条例で定める長期かつ独占的な利用をさせようとするときは、議会において出席議員の3分の2以上の者の同意を得なければならない。 3 普通地方公共団体は、公の施設の設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるときは、条例の定めるところにより、法人その他の団体であつて当該普通地方公共団体が指定するもの(以下本条及び第244条の4において「指定管理者」という。)に、当該公の施設の管理を行わせることができる。 4 前項の条例には、指定管理者の指定の手続、指定管理者が行う管理の基準及び業務の範囲その他必要な事項を定めるものとする。 5 指定管理者の指定は、期間を定めて行ふものとする。 6 普通地方公共団体は、指定管理者の指定をしようとするときは、あらかじめ、当該普通地方公共団体の議会の議決を経なければならない。 7 指定管理者は、毎年度終了後、その管理する公の施設の管理の業務に関し	a	指定管理者の選定手続については、具体的な事例の把握など、選定等の実態把握を行い、その調査結果に基づき透明性の高い手続を行うよう、地方公共団体へ周知するとともに、必要な情報提供など選定プロセスの透明性を確保するための所要の措置を講ずる。	所要の措置の実施時期を明示されたい、	(社)日本経済団体連合会	210	B	指定管理者制度に関する運用の改善	指定管理者制度の運用改善を図るため、総務省は地方公共団体に対して以下の点を周知徹底するとともに、必要に応じて法的的措置を行うべきである。 1 指定された事業者が当該施設の指定管理者として最適である理由を公表すべきである。 2 公募にあつては、十分な募集期間を確保すべきである(最低1ヵ月程度)。また、施設の概要や、人員費、施設管理運営費、事業収入等の経理に関する事項について可能な限り具体的に公表すべきである。 3 選定委員会は、外部有識者を主体として構成すべきである。また、審議結果や評価結果を公表すべきである。指定管理者による施設の管理・運営の評価方法を確立すべきである(利用者評価、外部評価等)。	地方自治法第244条の2 地方自治法の一部を改正する法律の公布について(通知)(2003年7月17日 総務省令第87号)では、条例で規定すべき事項について、指定の申請に当たっては、議決の申請書に事業計画書を提出させること、とされているが、実際の運用では、公募が採用されていない事例や、公募は実施されたが情報公開が十分であったり、選定委員会における選定プロセスの透明性が低い事例が見られる。	地方自治法第244条の2 地方自治法の一部を改正する法律の公布について(通知)(平成15年7月17日総務省令第87号)	総務省自治行政局行政課			
5057	5057211			208035	総務省	住民基本台帳法第12条、第36条の2、住民基本台帳法施行令第15条 住民基本台帳事務処理要領(昭和42年10月4日自治振第15号等) 住民票の写し等及び印鑑登録証明書に係る自動交付機所の設置にあり考慮すべき事項及び安全対策等について(平成17年3月28日 総務省令第249号)	住民票の写し等の請求者識別カードによる請求に基づく(交付)については、平成17年3月28日自治振第249号のとおり、自動交付機は個人情報保護等の観点から必要な安全対策を講じることとされている。 また、本人確認書類としては、住民基本台帳カード又は旅券、運転免許証その他官公署が発行した免許証、許可証又は資格証明書等(本人の写真が貼付されたものに限る。)であつて交付申請者が本人であることを確認するため市町村長が適当と認められるものとしてい	c	住民票の写し等の請求者識別カードによる請求に基づく(交付)については、平成17年3月28日自治振第249号のとおり、自動交付機は個人情報保護等の観点から必要な安全対策を講じることとされている。 また、本人確認書類としては、住民基本台帳カード又は旅券、運転免許証その他官公署が発行した免許証、許可証又は資格証明書等(本人の写真が貼付されたものに限る。)であつて交付申請者が本人であることを確認するため市町村長が適当と認められるものとしてい	要望者より下記の再意見が寄せられておりますので、再検討をお願い致します。 「多機能コピー機」とは、コピー・FAX以外に、オンラインでのチケット発券申込みやファミリーバイク自賠責保険申込み・証券の発行等を実現しているものである。インフラとしては、ホストコンピュータと各コピー機間はクロスドな高速ネットワークを構築してあり安全性には十分な配慮を行っているものなため、必要な安全対策等を十分に講ずることはできないという指摘はあたらない。 また、クレジットカードについては、官公署が発行するものではないと認められる。また、クレジットカードは、発行する金融機関において信頼度の確保は十分に行っているものと思われる。なお、「官公署が発行するもの」でなければ「本人確認の方法として十分である」とはいえないと考えられる。	(社)日本経済団体連合会	211	B	コンビニエンスストアの多機能コピー機を利用した住民票発行サービスの実施	コンビニエンスストアの多機能コピー機による住民票発行サービスを実施できるようにすべきである。本人確認を行う手段として、住民基本台帳カード以外に、本人特定の信頼度が高いカード(クレジット)を今後ICカード化される運転免許証)を認めらるべきである。	住民基本台帳法第3条、第36条の2 住民基本台帳法施行令第15号 住民票の写し等及び印鑑登録証明書の設置場所の選定にあり考慮すべき事項及び安全対策等について(平成17年3月28日 総務省令第249号)	住民基本台帳法第3条、第36条の2 住民基本台帳法施行令第15号 住民票の写し等及び印鑑登録証明書の設置場所の選定にあり考慮すべき事項及び安全対策等について(平成17年3月28日 総務省令第249号)	総務省自治行政局市町村課	2005年3月の総務省通達「住民票の写し等及び印鑑登録証明書に係る自動交付機の設置場所の選定にあり考慮すべき事項及び安全対策について」により、公共施設以外においても住民票の写しの交付を申請できるが、設置する機器は一定のセキュリティ対策を講じ、自動交付機の延長、週末開庁等のコストを負担せずに済む。なお、多機能コピー機とコンビニエンスストアのセンター間及びセンターと住民基本台帳カードに接続することにより、セキュリティが確保されたネットワークを構築できる。	2005年8月末時点で、自動交付機を設置した団体は76、住民基本台帳カードの発行枚数は約68万枚にとどまっている。	
5057	5057212			208036	総務省	地方税法第403条、第24条、第404条、第405条	固定資産の評価に関する事務に従事しているのは、市町村の職員である。	c	固定資産の現地調査及びそれに基づく評価(地方税法403、405)は公権力の公使である固定資産税の賦課処分と一体となる事務である。これは審査申出の対象となるなど課税行為として説明責任が生ずるものであるほか、現地調査については、原則により担保された質問検査権(家屋内部への強制的な立ち入り調査など地方税法353、354)に裏打ちされた実施するものであることから民間委託にじまないと考えられる。 ただし、上記に係る補助的業務(例えば、航空写真の撮影等)から判別できる現況把握や各種の課税参考資料の作成)を民間に委託することも可能であるほか、評価員・評価補助員に民間の専門的知識や経験を有する者を選任することも現行法上可能である。	要望者より以下のとおり再意見がきており、再度、貴省から回答を頂きたい。 「総務省の回答」は「補助的業務(中略)を民間に委託することも可能であるほか、評価員・評価補助員に民間の専門的知識や経験を有する者を選任することも現行法上可能である。」とされている。この旨を明記するとともに、どのような条件のもとで民間人を選任できるかという基準を示し、地方公共団体に周知徹底すべきである。人員削減を行っている地方公共団体では評価員・評価補助員に民間人を選任したいというニーズがあるが、「現行法上それが可能か」はわからない、との理由で民間人を選任しないケースがあるので、総務省が上記方針を地方公共団体に周知徹底すべきである。	(社)日本経済団体連合会	212	B	固定資産税の課税における土地、家屋、償却資産の調査、評価業務の民間開放(新規)	固定資産税の調査業務ならびに評価業務について包括的な民間委託を可能とする。固定資産評価員及び固定資産評価補助員の選任に当たり、積極的に民間人を登用すべきである。	地方税法第353条、第404条、第405条、第406条	総務省自治行政局固定資産課	固定資産税の課税にあたり、固定資産評価員及び固定資産評価補助員が現地調査を行う。評価員・評価補助員は、これに基づいて市町村長が価格を決定することになっている。これらの調査、評価業務については、建設コンサルタント等、民間には多方面にわたる専門的知識が蓄積されている。業務の民間開放を行うことと評価精度やアカウントリテの向上が期待されるだけでなく、アフターリングにより効果的な業務遂行が可能となる。			
5057	5057213			208037	総務省 厚生労働省	地方自治法第234条の3	第234条の3 普通地方公共団体は、第214条の規定にかかわらず、翌年度以降にわたり、電気、ガス若しくは水の供給若しくは電気通信設備の提供を受ける契約又は不動産を借りる契約その他政令で定める契約を締結することができる。この場合においては、各年度におけるこれらの経費の予算の範囲内においてその給付を受けなければならない。	C.対応不可	地方自治法では、翌年度以降にわたる物品の借り入れ又は役務提供を受ける契約で、その契約の性質上翌年度以降にわたり契約を締結しなれば当該契約に係る事務の取扱いに支障を及ぼすものに限る。例外として、債務負担行為として予算で定めること、長期継続契約を締結することができるものとされているが、ご提案の特定健康診査等の委託は、このような性質のものには客観的に認められない。	(社)日本経済団体連合会	213	A	特定健康診査等の委託における複数年度契約の容認(新規)	特定健康診査等による医療費削減の効果を単年度で示すことは困難であることから、同一事業者が中長期的に事業に取り組み、複数年度契約を認めるべきである。	地方自治法第214条、第234条の3 高齢者の医療の確保に関する法律第28条 健康保険法第63条第3項各号	総務省自治行政局行政課 厚生労働省健康局国民健康保険課	2009年度から健康保険(医療)の運営主体に、40歳以上の加入者などへの生活習慣病向け健康診断(特定健康診査)と特定保健指導の実施が義務づけられる。保険者は、特定健康診査等について、健康保険法第63条第3項各号に掲げる病院又は診療所その他適当と認められるものに対し、その実施を委託することができることとなるが、制度の詳細は今後定められる。				

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5065	5065008			z08042	総務省	地方自治法第244条の2	第244条の2 普通地方公共団体は、法律又はこれに基づく政令に特別の定めがあるものを除くほか、公の施設の設置及びその管理に関する事項は、条例でこれを定めなければならない。 2 普通地方公共団体は、条例で定める重要な公の施設のうち条例で定める特に重要なものについて、これを廃止し、又は条例で定める長期かつ独占的な利用をせよとするとときは、議会において出席議員の3分の2以上の者の同意を得なければならない。 3 普通地方公共団体は、公の施設の設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるときは、条例で定めるところにより、法人その他の団体であつて当該普通地方公共団体が指定するもの(以下本条及び第244条の4において「指定管理者」という。)に、当該公の施設の管理を行わせることができる。 4 前項の条例には、指定管理者の指定の手段、指定管理者が行う管理の基準及び業務の範囲その他必要な事項を定めるものとする。 5 指定管理者の指定は、期間を定めて行うものとする。 6 普通地方公共団体は、指定管理者の指定をしようとするときは、あらかじめ、当該普通地方公共団体の議会の議決を経なければならない。 7 指定管理者は、毎年度終了後、その管理する公の施設の管理の業務に関し、	a		指定管理者の選定手続については、具体的な事例の把握など、選定等の実態把握を行い、その調査結果に基づき透明性の高い手続を行うよう、地方公共団体へ周知するとともに、必要な情報提供など選定プロセスの透明性を確保するための所要の措置を講ずる。		所要の措置の実施時期を明示されたい。	社団法人日本コーポレート協議会連合会 JNB総合研究所	8	A	自治法 / 指定管理者制度の執行充実	当制度が制定されて2年以上経ったが、公募化の比率は全体事業の半分、更に、公募化されても9割が自治体の外部団体に発注されている。いわば、執行不全ともいえる状況である。また、公募を行う旨の告知や公募結果の公開が、東京都などの一部の自治体以外では広く、大規模に行われていない。安価で行えるホームページなどを活用するなど自治体を指導してほしい。官から民への象徴的制度改革であり、これらの改善について主官官庁から自治体への指導を御願しいたい。	当制度が制定されて2年以上経ったが、公募化の比率は全体事業の半分、更に、公募化されても9割が自治体の外部団体に発注されている。いわば、執行不全ともいえる状況である。また、公募を行う旨の告知や公募結果の公開が、東京都などの一部の自治体以外では広く、大規模に行われていない。安価で行えるホームページなどを活用するなど自治体を指導してほしい。官から民への象徴的制度改革であり、これらの改善について主官官庁から自治体への指導を御願しいたい。	2年以上経ったが、公募化の比率は全体事業の半分、更に、公募化されても9割が自治体の外部団体に発注されている。いわば、執行不全ともいえる状況である。また、公募を行う旨の告知や公募結果の公開が、東京都などの一部の自治体以外では広く、大規模に行われていない。安価で行えるホームページなどを活用するなど自治体を指導してほしい。官から民への象徴的制度改革であり、これらの改善について主官官庁から自治体への指導を御願しいたい。	自治法	総務省	
5066	5066004			z08043	全国庁	国・民法第466条	国・要望事項については、平成17年4月から債権譲渡対象を特定目的会社等まで拡大した。	国・d	-	国・d *総務省では既に措置済み		要望主体から「各省庁及び地方自治体において、統一かつ早急な対応を要望されていることに関し、貴省の見解を確認されたい。	社団法人リース事業協会	4	A	国・地方自治体向け金銭債権の証券化に関する債権譲渡禁止特約の解除	各省庁及び地方自治体において、統一かつ早急に債権譲渡禁止特約の解除の対象となる契約(リース契約等)及び譲渡対象者の拡大(特定目的会社等)を望む。	各省庁及び地方自治体ごとに対応が異なり、引き続き、統一かつ早急な対応が求められる。		全国庁、地方自治体		
5066	5066011			z08044	警察庁、総務省、財務省、国土交通省	道路運送車両法、自動車登録法、自動車検査場の確保等に関する法律、自動車重量税法、自動車損害賠償保障法、地方税法、地方自治体条例等	自動車保有関係手続(検査・登録、保管場所証明、自動車関係諸税等の納付等)のワンストップサービス化については、平成17年12月から、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府の4都府県、さらに、平成18年4月からは、埼玉県、静岡県、2県において、すべての関係機関にまたがるワンストップサービスの基本的な手続であり、ワンストップ化による申請者の利便性向上の効果が大きい新車の新規登録(型式指定車)を対象として、自動車保有関係手続のワンストップサービスを稼働させてあり、これにより、各種税の納付手続の電子化や保管場所証明手続の電子化等が可能となっている。 当該システムは、大量に自動車保有する方にも配慮したシステムとするため、入力項目を集約した申請画面や税・手数料のまとめ払いの機能、代行申請の機能を持たせており、今後は、申請自体もまとめて行うための機能についても検討を行うこととしている。	d	-	今後は申請自体もまとめて行うための機能についても検討を行うこととしていることであるが、検討に係る具体的なスケジュールを明示されたい。また、現時点では、対象地域が新車の新規登録(型式指定車)に係るものに、対象地域が都府県に限られているが、今後の対象手続及び対象地域の拡大に関する具体的なスケジュールに関しても明示されたい。		社団法人リース事業協会	11	A	自動車の生産・販売・流通に伴って必要となる諸行政手続(検査・登録・国、庫庫証明・納税・地方、自賠責保険確認・国)等の電子化は、新車の新規登録については平成17年12月から稼働とされ、その他の手続は平成20年を目途に段階的に進めるとされているが、電子化に際しては、大量に自動車保有する者の手続き等を充分に考慮すること。	電子化により、申請項目の共通化、統一化と申請に必要な添付書類の削減化ができれば、自動車関連業界の生産・販売・流通に係る申請及び手続代行コストは大幅に軽減され、その軽減分を直接部門へ投入することでの新たな自動車リース市場の開拓が促進され、経済活性化に資する。	大量に自動車を所有する者が自動車関係諸手続を行う場合、現状では膨大な手間がかかるが、電子化により、一括して行うことができれば、大きなメリットがある。特に、リース会社、自動車重量税、自動車損害賠償保障法の効率化、円滑化の観点から、電子化を図る必要があると考えられる。	道路運送車両法、自動車登録法、自動車検査場の確保等に関する法律、自動車重量税法、自動車損害賠償保障法、地方自治体条例等	国土交通省、財務省、総務省、警察庁、地方自治体			
5066	5066017			z08045	総務省	地方自治法施行令第117条の11	第167条の11 第167条の4の規定は、指名競争入札の参加者の資格についてこれを準用する。 2 普通地方公共団体の長は、前項に定めるもののほか、指名競争入札に参加する者に必要な資格として、工事は製造の請負、物件の買入れその他当該普通地方公共団体の長が定める契約について、あらかじめ、契約の種類及び金額に応じ、第167条の5第1項に規定する事項を要件とする資格を定めなければならない。 3 第167条の5第2項の規定は、前項の場合にこれを準用する。	C.対応不可	-	地方公共団体における入札参加資格に関する具体的な基準の決定は、各地方公共団体に委ねられているところであり、国の関与により入札参加資格審査申請書の様式を全国統一とすることは困難であるが、地方公共団体の自主的な検討と判断の結果、様式の統一化や手続の共通化が図られることは、申請者の負担軽減の観点から望ましいものと考え、総務省としても、これまで国において各省申し合わせにより統一様式が定められた際には、各地方公共団体における取組の参考となるようこれを周知してきたところであり、今後も国の動向等を踏まえつつ、適宜対応を検討することとしたい。		社団法人リース事業協会	17	A	指定業者登録様式の統一化	指定業者登録様式については、各地方自治体ごとに異なっており、作成者の負担となっている。	各地方自治体とも登録様式の記載事項のほとんどが同一の事項であり、様式・記載内容の統一は可能であると考える。		総務省、地方自治体			

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望種別(規制改革/民間開放)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5072	5072001			z08046	総務省	地方公務員法第7条第3項	地方公務員法第7条第3項において、人口15万未満の市、町、村及び地方公共団体の組合は、条例で公平委員会を置くものとされている。人事委員会は、給与に関する研究を行いその結果を地方公共団体の議会並びに給与又は任命権者に提出すること並びに給与に關し請ずべき措置について地方公共団体の議会及び長に勧告することができるが、公平委員会はこれらの事務の処理を行うことができない。	C	-	人事委員会は、職員数が多く(人事管理が)複雑な地方公共団体に設置されて幅広い権限を行使する行政機関であり、その役割を果たすためには専門的なスタッフを相当数必要とするものである。したがって、規模の小さい地方公共団体による設置を認めることは、行政の効率的運用と経費の節減等の観点から適当ではないと考えられる。地域民間給与を適切に反映した地方公務員の給与決定については、平成18年3月に「地方公務員の給与のあり方に関する研究会」において提言が行われたところであり、提言においては、地方公務員の給与決定において、地域の民間給与とよく反映させるためには、人事委員会機能の発達と強化が不可欠であるが、人事委員会機能の発達や強化を現実に行うためには、人事委員会の人員体制や専門能力についても強化、向上を図る必要があるとされている。また、市町村単位に民間給与を調査することは、考慮すべき民間事業の従事者が勤務する事業所が大きく幅広くなるとともに、サンプル数が制約されること、市町村にとって物理的に人的に負担が大きくなることを踏まえ、現実的ではなく、まず都道府県の人事委員会の機能が十分に発揮され又は強化されることにより、地域民間給与を適切に反映した都道府県の公民校差の算定や給料表の明示、資料の公表等の改革がなされることを前提に、これを参考にして市町村が具体的な給料表等を整備することで、間接的に地域民間給与の反映を行うこととするよう検討すべきであるとされている。提言においては、かかる観点から、都道府県内の民間給与のデータ等を提供する制度の創設や都道府県・市町村の人事当局相互間の連携強化等といった具体的な施策についても提言されており、地域の民間給与との適切な反映については、かかる研究会の提言を踏まえ、開		山形県長井市	1	A	人事委員会の設置基準の緩和	人口15万人未満の市町村は、地方公務員法第7条第3項の規定により、公平委員会を設置するものとされ、人事委員会の設置が認められていない。人口15万人未満の市町村においても市町村の選択により市町村職員の給与に関する研究、報告及び勧告の権限のみを有する人事委員会の設置を可能とし、当該団体内の民間事業者の従業員の給与を調査し、当該市町村職員の給与と比較して決定することを可能とする。	市町村職員の給与は、行政区内の一定規模の民間事業者の相当職種の給与等を参考に適正な水準に決定することが地方自治の本旨に適合するものであるが、現状では、大規模な市以外の市町村については、当該民間事業者の給与等を把握できていない、市民との協働によるまちづくりが一層求められている中で、市町村職員の適正な給与決定に資するため、人事委員会による給与に関する調査、報告及び勧告の権限を大規模な市以外の市町村にも有することが必要である。	地方公務員法第7条第3項	総務省			
5075	5075001			z08047	総務省	消防法第9条 消防法施行令第5条 対象火気設備等の位置、構造及び管理並びに対象火気器具等の取扱いに関する条例の制定に関する基準を定める省令第16条等	旅館、飲食店等の防火対象物の地階等に設ける厨房設備の天蓋は、市町村条例で定める基準に従い自動消火装置を設け、その天蓋等の清掃を行い、火災予防上支障がないよう維持管理することが必要とされている。	D	-	現行制度により、厨房設備については、火災予防上支障がないよう維持管理することを義務付けている。		-	セコムアラーム	1	A	フード等用簡易自動消火装置点検の法的整備	フード等用簡易自動消火装置点検実施の義務を法的に明確化して頂きたい	設置者が消火装置そのものの存在を把握していない・新築時に他の設備(空調・衛生・防災設備等)一括で納入されている・常時使用される設備ではない・設置場所が厨房の一角(自立しない場所)である。設置者が点検の重要性を理解していない・火災時に消火装置が起動することを理解していない・点検を実施しても装置が起動すると思いがちである。点検を実施しても装置が起動しない・点検を実施しても装置が起動しない等の理由で火災が起きた時点で正常に機能しない可能性があり、設置義務化はされていても、実際には意味をなさないことになる。設置者の点検の重要性を認識してもらう観点からも何らかの対策を講じるべきである。	消防法	総務省		
5077	5077001			z08048	人事院 総務省 厚生労働省	国家公務員の育児休業等に関する法律第2条第1項	(国家公務員) 育児休業の取得は、同一の子について、原則として1回に限られている。ただし、人事院規則で定める特別の事情がある場合には再度の育児休業が認められており、その特別の事情として、職員と配偶者が交互に子を養育することが限定的に認められている。これにより、現行制度の下でも、職員が育児休業の承認の請求の際に任命権者に対して育児休業計画書を提出し、職員の育児休業終了後に引き続いて配偶者が3ヶ月以上わたって子を常態として養育した場合には、職員は一回限り再度の育児休業を請求することができる。(地方公務員) 育児休業の取得は、同一の子について、原則として1回に限られている。ただし、条例で定める特別の事情がある場合には、その特別の事情の一つとして、職員と配偶者が交互に子を養育することが限定的に認められている。これにより、現行制度の下でも、職員が育児休業の承認の請求の際に任命権者に対して育児休業計画書を提出し、職員の育児休業終了後に引き続いて配偶者が3ヶ月以上わたって子を常態として養育した場合には、職員は一回限り再度の育児休業を請求することができる。	国家公務員 a 地方公務員 b	(国家公務員) 育児を行う職員が職務を完全に離れることなく(育児の責任も果たせる)よう、常勤職員のまま1週間当たりの勤務時間を短縮することができる育児のための短時間勤務制の導入に向けて人事院において検討中、長時間勤務における勤務形態の一つとして、1週間のうち2日半勤務する形態を導入する方向で検討しており、この場合、例えば、夫は月曜日(8時間)、火曜日(8時間)、水曜日の午前中(4時間)、妻は水曜日の午後(4時間)、木曜日(8時間)、金曜日(8時間)のような形で、夫婦が交替に育児を行うことが可能となる。(地方公務員) 1週間単位での育児休業の分割取得については、育児休業をする職員の業務を処理するための代替職員確保や業務分担の変更等、任命権者の負担が大きくなるが予想されるが、いづれにしても、国における育児のための短時間勤務制の検討の動向も踏まえ、地方における対応について検討する。	検討スケジュール(結論時期、措置時期)を明示されたい。	新産市	1	A	育児休業取得方法の柔軟化	現状の制度下で育児休業を取得しようとした場合、どうしても長期休業を要するを得ないため、職員の技能の低下やキャリア形成への影響を心配し、男性の取得者が伸び悩んでいる。また、男性の取得取得が進まない理由としては、「職場で男性が取得する雰囲気がない」という職場や社会の風潮が挙げられる。そこで、1週間という短期間を単位として夫婦が交互に取得できるようにすれば、男性もこれまでよりも気軽に育児休業を取得できるようになると考えられる。後々でも男性の取得取得が増えれば、依然として残る「育児は女性、という社会全体の意識を変えていくことができるのではないかと。また、育児休業の選択肢が増えることで、これまでの女性の育児負担が軽減され、出産退職を減らし、出産後の復職の可能性が向上するとも考えられる。さらには、両親が自ら手でも育てることで、保育所の需要が緩和され、待機児童の減少や自治体の適宜した財政状況の改善につながるという効果もある。そして、何よりも親子の絆を深めるといふ効果も見込めることである。少子化対策を考えた上でも大変重要である。	本市は、次世代育成支援対策推進法に基づき「特定事業主として、特定事業主計画書を策定し、「男性職員の育児休業、部分休業の取得率を平成21年度までに5%以上とする。ことを目標に掲げているが、これまで男性職員の育児休業取得率が1.1%という低い現状である。また、全国的に見ても男性の育児取得率は0.5%にとどまっている(平成18年度厚生労働省調べ)。この原因として、「育児は女性、という意識を持つ男性が依然として多いこと、長期間の育児休業により職場を離れることへの抵抗感がある」と考えられる。新産産等では、育児に当たっては利用しやすい労働環境の整備を望む声が高いこと、また取得単位を短くするなど利用しやすい制度が整備されていけば男性でも育児休業の取得が進むことが明らかになっている。そこで、1週間単位として夫婦が交互に育児休業を取得できるようにする等の柔軟な取得方法の柔軟化、選択肢の拡大をお願いするものだが、制度の改善に当たっては、夫婦の勤務先により利用できる制度に差があっては結局のところ利用の促進にはつながらないため、民間事業者・公務員の両方(全国的な制度改善を要するものである。	〔添付資料〕 平成18年6月21日付け日経新聞 平成18年6月25日付け毎日新聞	・厚生労働省 人事院 総務省	本市では、市役所職員が1週間以上の単位で交互に育児休業が取得できるよう条例改正等を行う方向で検討を進めている。(平成18年9月定例会議上程予定)			
5079	5079001			z08049	総務省	地方自治法 第231条 普通地方公共団体の歳入を収入するときは、法令の定めるところにより、これを調定し、納入義務者に対して納入の通知をしなければならない。 地方自治法施行令第154条 地方自治法第231条の規定による歳入の調定は、当該歳入について、所屬年度、歳入科目、納入すべき金額、納入義務者等を誤っていないかどうかその法令又は契約に違反する事実がないかどうかを調査してこれをしなければならない。 2 普通地方公共団体の歳入を収入するときは、地方交付税、地方譲与税、補助金、地方債、滞納処分費その他の性質上納入の通知を必要とし、納入を除き、納入の通知をしなければならない。 3 前項の規定による納入の通知は、所屬年度、歳入科目、納入すべき金額、納期限、納入場所及び納入の請求の事由を記載した納入通知書でこれをしなければならない。ただし、その性質上納入通知書によりがたい歳入については、口頭、掲示その他の方法によつてこれをすることができる。	d: 現行制度で対応可能	地方公共団体が納入義務者に対して行う納入の通知については、現行制度上オンライン化は可能である。なお、どのような手帳をオンライン化するかにについては、地方公共団体が費用対効果等を判断し、必要に応じて適切に行っているものと認識している。		株式会社日本総合研究所 三井住友カード株式会社	1	A	地方公共団体における歳入の納入通知書のメール化	現状、地方自治法において、地方公共団体の歳入の納入通知は、必要事項を記載した納入通知書でなければならないとされているが、納入通知書の代読としてeメールによる納入通知を可能とする為の法令上の措置をお願いしたい。	地方自治法施行令第154条第3項において「納入の通知は、所屬年度、歳入科目、納入すべき金額、納期限、納入場所及び納入の請求の事由を記載した納入通知書でこれをしなければならない」とされている。一方、e-Japan戦略のもと一部地方公共団体ではマルチチャネルネットワークに対応したインターネットによる納入を開始しており、また横浜市においても全国の自治体に先駆け、インターネットによるクレジットカード納付の実証研究を本年度実施したところである。インターネットによる納付を行う際、eメール等に納入の通知に必要な事項を記載すれば、紙の通知書は実用上、不要である。尚、本件実施する際の懸念点として、eメールの不審の問題や個人情報保護上の問題が挙げられるが、eメール上は個人を特定する情報は記載せず、事前に登録された認証記号等による納入義務者の本人認証を行った上で、インターネット経由で納入通知に係る情報を地方公共団体のサーバー等から取得する方法等を併用することにより解決できるものと思われる。インターネットによる納入の実現は、地方公共団体においては、住民サービス向上とともに、収納業務の効率化、コスト削減に寄与するものであるが、現状の納付書による通知ではその効果を十分に享受することができないものと思われる。	地方自治法第231条、地方自治法施行令第154条	総務省					

要望管理番号	要望事項管理番号	分割補助番号	統合	管理コード	所管省庁等	該当法令	制度の現状	措置の分類	措置の内容	措置の概要(対応策)	その他	再検討要請	要望主体	要望事項番号	要望事項別(規制改革A/民間開放B)	要望事項(事項名)	具体的要望内容	具体的事業の実施内容	要望理由	根拠法令等	制度の所管官庁等	その他(特記事項)
5083	5083003			z08050	総務省	地方自治法第196条	第196条 監査委員は、普通地方公共団体の長が、議会の同意を得て、人格が高潔で、普通地方公共団体の財務管理、事業の経営管理その他行政運営に関し優れた識見を有する者(以下本条において「識見を有する者」という。)及び議員のうちから、これを選任する。この場合において、議員のうちから選任する監査委員の数は、監査委員の定数が四人のときは三人又は五人、五人以内のときは一人とする。 2 識見を有する者のうちから選任される監査委員の数が、三人である普通地方公共団体にあつては少なくともその2人以上は、二人である普通地方公共団体にあつては少なくともその1人以上は、当該普通地方公共団体の職員で政令で定めるものとなつてはならない。 3 監査委員は、地方公共団体の常勤の職員及び臨時勤務職員と兼ねることができない。 4 識見を有する者のうちから選任される監査委員は、これを常勤とすることができる。 5 都道府県及び政令で定める市にあつては、識見を有する者のうちから選任される監査委員のうち少なくとも一人以上は、常勤としなければならない。	C-対応不可		ご指摘の監査結果と監査委員の構成についての因果関係があるか判断することはできないことから、これをもってご提案を受け入れることはできません。 なお、現行制度上、監査委員に当該地方公共団体の常勤の職員であった者を1人以上選任することが出来ないものであり、これを選任しないことも可能である。 また、議員については議会の有する本来の性格から執行機関をチェックするという監査委員の機能に適しているという観点から少なくとも1人を選任することとされているものである。		要望者から以下の再意見が寄せられており、再検討をお願いします。 (1)近年、外部評価や第三者評価などが実施されるようになり、組織の透明性・公開性が求められるようになってきています(例えば大学評価、病院機能評価、福祉施設評価など)。 (2)大阪市などの例(昨年来露わになった各部署の不正問題)に見られるように、監査委員制度は、本来の目的を果たしているとは言えない実態が散見・報道されています。「現行制度上、監査委員に当該地方公共団体の常勤の職員であった者を1人以上選任することが出来ないものであり、これを選任しないことも可能である。」とはいっても、現実には常勤の職員であったものを選任しない事例は殆どないようであり(事例があるのであればその実数を公表いただきたい)、法的に「当該地方公共団体の常勤の職員であったものを選任しないこととする」規定を設け、監査委員を当該自治体とは利害関係を有しない者から選任する監査委員制度とし、税金でまかなわれる自治体、実際に厳しい監査する制度とすべきです。 (3)自治体の透明性を高め、住民サイドの効率的な自治体運営のために、実態として知事や市長から独立した立場で監査・評価する監査委員制度の枠組みのために上記が必須です。	特定非営利活動法人「子ども無償環境を推進協議会」	3	A	監査委員は行政・議会から独立した人を選任すべき	自治体の透明性が高まり、効率的な自治体運営が期待されるようになる。	例えば住民監査請求をしても、監査委員が自治体と議会関係者である場合が多く、自治体寄りの結果が出されるケースが大半である。しかも監査委員のうち、見識を有する委員も多忙で、監査責任を十分に果たし得ていないケースのあることが懸念される。監査事務局も自治体の職員であることから、自治体とは独立した監査業務を果せていない懸念がある。少なくとも監査委員は、自治体(行政)及び議会とは独立した立場の人の選任を制度化すべきである。 本会で、大阪市や堺市に、携帯放送局や議会関係者の設置について、税金の不当支出であるとして、住民監査請求をしたことがあるが、市の言ひつのみで判定結果であった。	地方自治法第195条他	総務省、内閣府、他		
5083	5083004			z08051	全庁庁	-	審議会等の公開については、「審議会等の整理合理化に関する基本的計画(平成11年4月27日閣議決定)」において、会議又は議事録を速やかに公開することを原則とし、議事内容の透明性を確保することとされているところである。 総務省に置かれていた審議会等においても原則として会議又は議事録を速やかに公開しているところ。	d	-	「審議会等の整理合理化に関する基本的計画(平成11年4月27日閣議決定)」にしたがって、議事録等について可能な限り速やかに公開するよう努める。			特定非営利活動法人「子ども無償環境を推進協議会」	4	A	政府省庁の審議会は原則的に公開(傍聴可能)とすべき	例えば厚生労働省の審議会(厚生科学学術協議会)は公開(傍聴可能)で、事前にホームページで広報されている。しかし、例えば財務省の財政制度等審議会(たばこ事業等文科会、税制調査会)などは、財務省のホームページの通知予定には掲載されているが、非公開となっている。これら審議会等は、公開(傍聴可能)とすべきである。	政府決定のための審議会の審議を国民が傍聴することにより、審議の透明性が高まり、かつ国民も情報を速やかに知ることにより、早期の情報入手と対応が可能になる。	政府省庁の審議会の資料が後日(1~2週間後)そのホームページで公開され、1~数か月後には議事録が公開されているようであるが、国民が審議情報の詳細を知るには余りにタイムラグがあり過ぎる。 マスメディアのみ公開したり、会後、審議会長が記者発表や会見をする場合もあるが、あわせて公開(傍聴可能)を制度化すべきである。 動きが早くなっている政策決定や実施にあたって、国民の知る権利を保障し、合意形成を進めるためには、これは不可欠な制度である。		全庁庁	
5085	5085001			z08052	総務省	日本電信電話株式会社等に関する法律(昭和59年法律第85号) 電気通信事業法(昭和59年法律第86号)	「日本電信電話株式会社等に関する法律」において、日本電信電話株式会社、東日本電信電話株式会社及び西日本電信電話株式会社の組織形態が規定されている。 「電気通信事業法」においては、市場支配的な電気通信事業者に対する規制を含む公正競争ルールが規定されている。	b	-	「通信・放送の在り方に関する政府与党合意(平成18年6月20日)」において、「高度で低廉な情報通信サービスを実現する観点から、ネットワークのオープン化など必要な公正競争ルールの整備等を図るとともに、NTTの組織問題については、ブロードバンドの普及状況やNTTの中期経営戦略の動向などを見極めた上で2010年の時点で検討を行い、その後速やかに結論を得る。」とされたところである。 さらに、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006(平成18年7月7日閣議決定)」において、「通信・放送の在り方に関する政府与党合意」に基づき、世界の状況を踏まえ、通信・放送分野の改革を推進する。」とされたところである。 総務省としては、上記閣議決定に基づき所要の措置を講じていく所存である。		要望者の要望内容等をも踏まえ、所要の措置を講じていただきたい。また、検討、実施の工程を具体的に示されたい。	KDDI株式会社	1	A	NTTの在り方	(ドミナンスへの対応) 特殊会社である特殊会社が統括するNTTグループは、傘下の事業会社の経営一体化により、グループ市場支配力を維持(統一ブランドの継続利用、グループ内の人事・情報の共有等)。 特に、同じ(特殊会社)であり、公社時代に構築したボトルネック設備を有するNTTは、競合する他の中継事業者との接続に必要とする事業形態に再編成。 しかしながら、NTT東西の設備管理部門から見て、設備利用部門と他事業者との同等性を確保するルールが不十分なため、固定通話分野ではNTT東西の市場支配力が圧倒的。 (ドミナンスへの対応) 特殊会社である特殊会社が統括するNTTグループは、傘下の事業会社の経営一体化により、グループ市場支配力を維持(統一ブランドの継続利用、グループ内の人事・情報の共有等)。 特に、同じ(特殊会社)であり、公社時代に構築したボトルネック設備を有するNTTは、競合する他の中継事業者との接続に必要とする事業形態に再編成。 しかしながら、NTT東西の設備管理部門から見て、設備利用部門と他事業者との同等性を確保するルールが不十分なため、固定通話分野ではNTT東西の市場支配力が圧倒的。 (ボトルネックへの対応) ボトルネック設備を有するNTTは、競合する他の中継事業者との接続に必要とする事業形態に再編成。 しかしながら、NTT東西の設備管理部門から見て、設備利用部門と他事業者との同等性を確保するルールが不十分なため、固定通話分野ではNTT東西の市場支配力が圧倒的。	日本電信電話株式会社等に関する法律 電気通信事業法 総務省電気通信審議会 日本電信電話株式会社 日本電信電話株式会社の在り方について、日本電信電話株式会社の再編成に関する基本方針 規制改革推進3カ年計画 規制改革・民間開放の推進に関する第2次答申	総務省、内閣府			
5085	5085002			z08053	総務省、文部科学省					文部科学省が回答			KDDI株式会社	2	A	電気通信役務利用放送事業者が行う光ファイバを用いたIPマルチキャスト放送(以下、「IPマルチキャスト放送」)による地上放送等の同時再送信に関する著作権法上の位置付け	IPマルチキャスト放送による地上放送等の同時再送信を著作権法第2条第1項第9号の2の位置づけにして頂きたい。	IPマルチキャスト放送事業者は、電気通信役務利用放送法により、総務大臣からの登録を受け放送業務を行うことが認められている。 IPマルチキャスト放送による地上放送等の同時再送信は、有線放送と位置づけられている。 IPマルチキャスト放送による地上放送等の同時再送信は、有線放送と位置づけられていない。 IPマルチキャスト放送による地上放送等の同時再送信は、有線放送と位置づけられていない。 IPマルチキャスト放送による地上放送等の同時再送信は、有線放送と位置づけられていない。	著作権法 電気通信役務利用放送法	文化庁長官官房、総務省地域情報通信政策局、情報通信政策局、内閣官房(知的財産戦略本部、IT戦略本部)		

